



Atlas'

-I-

Qui prope
et altissimus
et altissimus
et altissimus
et altissimus
et altissimus

et altissimus
et altissimus
et altissimus
et altissimus
et altissimus

In nomine
et altissimus
et altissimus
et altissimus
et altissimus

聖靈
火

Imanu'el

Studio ***46

By faith alone, by grace alone, glory to God alone.

目次

「聖」：-神探シ-	
続・探偵に悪魔は反則です’	3
「霊」：Imanu’el	
謡	13
寂	15
__soul: 『白火』	16
__spirit: 『赤火』	28
__anima: 『黒火』	41
.....	52
「火」：Apost-re	
インマヌエル-神-	57

「聖」：-神探シ-

続・探偵に悪魔は反則です'

夢を見ました。長くて明るくて、温かい夢。

私と「シオン」が、楽しそうに高校に通ってる。それを兄さんが見守って、私はこれから、人間の世界にまだいると決めるの。

それはわたしがシオンと一緒にいるって決めたから、そうなった世界に思えました。

「シオン」と、「氷輪^{ひわ}くん」。わたしの兄さんを助けてくれた悪魔。だからわたし、ずっと探してたんです。

わたしは、誰だったんだろう。どうしてなのか、よくわかりません。そして私は、どうして悲しそうなんだろう。

憶えてるのは、神隠しの兄さんに連れられて行った、真っ黒な船の中の普通の船室。

月の光以外は闇しかなくて、いったいどこなのかさっぱりわからないけど、内装は色んな植物や、沢山の猫系のもので飾られてて、何だか楽しそうなお部屋です。

「やーだ！ 帰んない！ せっかくここに慣れてきたところなのにー！」

そこにいたのは、「シオン」の方の氷輪くん。一見は何の損傷もない、青銀の髪で学生服の姿。

「神」の世界って、概念とか心とか、そういうものさえあれば形をとれるんだって。兄さんの「神」に心臓を奪われてここに来た氷輪くんと、こうしてお喋りできちゃいます。「戻ったってカラダがないじゃん、翼^{よくる}輪^{りん}あれで動けそうにないじゃん！ それならこっちにいる方が楽しいし！」

「汐音」らしい氷輪くんは、黒髪の冷静な「氷輪^{翼輪}くん」と違ってにぎやかだね.....。

兄さんが扉の外で待ってる中で、わたしは初対面の汐音が座るベッドに、ちょこんと並んで腰を掛けます。

「ここ、確かに明るいお部屋だけど.....そんなに楽しいの？ 氷輪くん」

「楽しいよー。媒介さえあれば何でもすぐに形になるんだもん。もう猫羽ちゃんも、『神』になっちゃいなよ？」

うん.....紫音っていう天使の氷輪くんは、ここに来ちゃダメって言ってたのにな。汐音は紫音とは少し違う、かごめの悪魔さん。

楽しいから、心配せずにわたしや兄さんも好きにしろ、って。取りつく島を全部、笑顔で塞いじゃってる。

わたしは迷います。氷輪くんの弱味は長い付き合いで知ってて、そこに付け込むことは簡単だから。

——オレにもほんと、サイアクな末路だよな。

でもそれは、今は違う気がする。わたしは悪魔の汐音に勝ちたいんじゃなくて……話をするために来たんだから。

とにかくわたしは、きいてみるしかありません。

「氷輪くんはどうして、ここにいるの？」

「だから、楽しいからだってー」

「どうして楽しいの？」

「そんな細かい理由はわかんないよ。っていうか、考えたこともないし」

にこにこ汐音は、ごろんと倒れて、ベッドから足をたらして天井を見上げました。

「猫羽ちゃんこそ、何でここに来たのさ？」

「それは——兄さんや氷輪くんに、会いたかったから……」

「そこに理由をきかれると困らない？ オレと猫羽ちゃん、けっこう似た者同士だって、オレはこっそり思ってるんだけど」

……う。汐音はひょっとして、黒髪の時の氷輪くんよりも容赦がないかもしれない。

一緒に高校にいたのは、「シオン」じゃなくて「氷輪くん」。わたしに心を開いてはくれないけど、守ってきてくれた黒髪の悪魔さん。

柔らかな布団の上で大の字に手を広げて、汐音が満足そうな顔で笑ってます。

「こうなった以上は、こうなるしかないじゃん？」

汐音は、達観してるというより、諦めてるみたい。

わたしがじっと、不満いっぱいに見つめると、ちょっとバツが悪そうに話を続けてくれました。

「オレが帰らなくても、時雨はツバメに戻れるよ。それはわかってるよね？」

「……」

「翼権は天の国で眠る。『汐音』が帰るとすれば、オレを殺した時雨……ツバメの翼になる。別にそれでもいいけど、ここにいるか、ツバメの翼になるか、それを『オレが』選ばなきゃいけないの？」

ツバメという兄さんを、「鍵」——大切な人にしたシオン。でも兄さんは「神」様の時雨しぐれでもあって、シオンをここに連れてきたのは時雨兄さん。

そっか。シオンは、時雨兄さんの望みをききたいんだ。時雨兄さんは逆で、シオンがやりたい方を決めてほしくて、こうなってるんだね。

「オレも翼権も、誰かの都合で造られた悪魔だから、猫羽ちゃんの都合で動けばいいんだろうけど。時雨は猫羽ちゃんの望みは嫌なんだよ」

「……え？」

「オレと時雨が消えた世界で、猫羽ちゃんには幸せになってほしい。それでもオレが望むなら帰るけど、オレも望まないなら帰らない。究極のところは、それじゃないかな？」

それだとまるで、二人が時間を止めたのは、わたしが原因……？

それを言いたくなかったから、汐音はここまではぐらかしてきた？

痛みをのせる蒼い目を観るとわかりました。さっき兄さんに、色の無い目で言われた声を思い出します。

——誰かに都合良く動かされてるといい加減気付け。

二人が決めてこうなった世界を、後からかきまわしてるのはわたし。どうしてそうなったんだっけ？

そもそも、どうしてわたしには、それができたんだっけ？ 大事な何かがおかしくて、わたしは何も言えなくなってきました。

「まあオレは、そこまで考えてなかったけどね。時雨は多分オレだけでなく、猫羽ちゃん達のためにここに留まってるよ」

「……——」

「だから、帰れて言ってもきかないんだよね。オレは正直、それで猫羽ちゃんに何かあったとしても、それが猫羽ちゃんの望みなら仕方ないと思うんだけど」

汐音とツバメ兄さんが帰ったら、その後にわたしに起こる何か。時を渡る時雨兄さんはそれを知っててためらってる。

汐音はわたしも兄さんも心配してる。でもわたしと同じで、何が起こるかは知らないから、時雨兄さんに何も言えないんだ。時雨兄さんは誰にも言わないだろうし……。

そう思ったところで、ひょいっと、汐音が起きてベッドから立ち上がりました。

「おいでよ、猫羽ちゃん。ここまで来てくれたお礼に、見せたいものがあるから」

「——え？」

そのまま汐音が部屋のドアを開けると、その先は何故か船の廊下じゃなくて、シノ……わたしをここに送ってくれた人がいるはずの、小さな聖堂があったのでした。

汐音について聖堂に出ると、ぱたん、と汐音がすぐに後ろの扉を閉めます。

高校の教室より少し広い聖堂には、二人、祭壇に向かって膝立ちをして、祈りを捧げるヒト達がありました。

「.....——」

一人はシノで、氷輪くんと契約してるはずのヒト。でも、今より若い頃の姿みたい。ということ、これは過去の聖堂の光景？

シノの隣にいるのは、とても不思議な、ツインテールみたいに見える淡い白緑のふわふわ髪。わたしより年下そうな女の子で.....。

「このヒトは.....天、使？」

「うん。翼権がずっと、探し続けてる奴」

「——」

あんまりあっさり、汐音が遠い笑顔で言うから、心がすぐに伝わってきました。

「あの教会に結界を張った奴。あの天使の羽を翼権は預かってて——いつかまた、出会えた時に返すはずだったんだ」

とても温かいのに、時間が止まってしまった感情。辛い、悲しい、そう思うことができないほどに、何処かに遠ざけられた痛み。

そこでもう一度、さっき閉めた聖堂の扉を汐音が開きます。

「今度はこっち。ほんと便利だよ、ここって何処でも、記憶の媒介がある世界なら覗けるからね」

聖堂から開けた扉は、今度は広い草原に続いてました。

今度は汐音は扉を閉めずに、祭壇を振り返りながら言います。

「ここは翼権が、さっきの天使と——それから、烙人兄ちゃん^{ラクト}に出会ったところでさ」

ラクト。それは確か、「私」の大事なヒトのはずで——

心なしか、汐音がちょっと辛そうに、自分の首を触りながら笑いました。

そこには大きな傷痕があります。氷輪くんに元々ある古傷だけど、わたしが氷輪くんと契約した頃には隠されてた傷でもあります。

「この傷ができた時に、さっきの天使が助けてくれて。でもオレが吸血鬼って気付かれて、やっぱり討伐されそうになった時、止めに入ったのが通りすがりの烙人兄ちゃん」

そうなんだ.....それなら氷輪くんにとっては、とても大事な思い出のはずだよ。それを見せてくれるなんて。

そう言えば部屋に入って来た時から、汐音の首にはその傷がはっきり見えてました。氷輪くんらしいいつもの黒の手袋も。

天使の紫音に会った時には、なかった傷痕。それが意味することを、これから汐音が教えてくれます。

木もほとんど生えてなくて、寂しい草原には誰もいません。もうその天使のヒトも、ラクトもないことを示すように。

「翼橿の記憶にはいつもここがある。翼橿の時間はここで止まって、何かある度にこの時のことを思い出してる」

「.....」

「翼橿の居場所はここでいいんだ。.....でも、オレは違うんだよ」

草原に立ち尽くすわたしの後ろで、扉を開けたまま佇む汐音が、苦しそうに笑いしました。

さっきからずっとそうです。どの言葉の裏にも全部、汐音と翼橿は違うって、そんな心が潜んでたから。

「オレは『翼』でいい——ツバメの後ろにいたい。.....たとえここに、戻れなくなっても」

氷輪くんは、兄さんの「翼」になればいい。どこかでそう言ったわたしへの、それが汐音のこたえ。

「でもそうしたら.....オレはいったい、誰になるの？」

それはきっと、氷輪くんの本来の願いとは違う。だから汐音は望み切れないんだ。

氷輪くんが会いたいのは、さっきの天使のヒト。でも汐音はその天使のヒトを、氷輪くんの記憶で知っているだけ.....。

氷輪くんから心臓を奪ってまで、汐音を呼び起こした時雨兄さん。
——そうしないと、汐音が表れないから。

汐音が「意味」を欲しがったのは、きっとそんな、氷輪くんですらなくなることへの最後の抵抗。

氷輪くんにはある傷痕を、この先紫音はなくしてしまう。ラクトがくれた、大事な手袋も外した紫音。汐音がそれを知ってるわけじゃなくても、予感があるんだと思う。

汐音があんまり、淋しい顔で笑ってるから、わたしは何も言えなくて.....ただ、氷輪くんにとっては大事な草原に、おそろおそろ足を踏み出しました。

大きな強い風が、わたしと汐音をへだてるみたいに、緑の海にさざ波を立てて駆け抜けます。

強い風の草原で、扉に留まる汐音の気配だけじゃなく、色んなヒトがわたしに話しかけてるような気がしました。

——ここに、来ちゃだめ。アークちゃん。

——いいから帰れ、猫羽。

でもわたしは、汐音の心が一番苦しかった。
.....痛い、って。本当はそう泣いてる、小さな生まれたての悪魔さんがそこにいるの。
汐音がいると、氷輪くんだけでなく、ツバメ兄さんやわたしにも良くない影響がある。
だから汐音は、一人でここに隠れに来たんだ。
本当は.....自分がいない方が、良かったんだって。

誰もいない。汐音に大丈夫、と言ってあげられるヒトは、何処にもいなかったんだ。
時雨兄さんはわたしを守ろうとしてる。わたしだってここに来るまで、汐音を知らなかった。わたしが連れ戻しに来たのは「氷輪くん」だった。
時雨兄さんは、すごく勝手。汐音を呼び起こしておいて、一番には優先しないんだ。大事には思ってるけど、わたしを守る方がもっと大事だって。
汐音はそれも、当たり前を受け入れちゃってる。だから天使の悪魔なんだ。
そんなのって、痛いよ.....痛くて当たり前だよ、氷輪くん.....。

汐音に心配は、かけたくなかったから。
両目に滲んでくる涙が、汐音には見えない所まで行ってから、わたしは草原で振り返りました。
「.....シオン。わたしもそうだけど——自分って、いっぱいいるよ？」
「.....」
「それはシオンだけじゃないよ。二つ以上の願いができて、どっちかを選ぶことが苦しいなんて、よくあることだよ。だからそれは.....シオンがちゃんと、生きてるってことだと思うよ」
それだけは今、伝えておかないと。いつもは出さない大きな声を意識します。

天使の紫音が教えてくれたこと。この先「冬花紫音」になるかもしれない、自分の道を選ぶ前の汐音。
でもそれは、一人ぼっちになるわけじゃない。
たとえば氷輪くんと呼べなくなっても、シオンだっていい。それだけはわたし、信じたかったから。
「だから.....シオンのなりたいヒトに、なっちゃ駄目なの？」

どぼん、と。草原が急に消えて、世界が真っ暗になりました。
何が起こったかはわからないけど。もう、帰らなきゃいけないみたいです。
命の水玉。毎夜の暗い水底に墮ちる直前に、力の限り、わたしは最後に叫びました。
「わたし——わたしは、どんなシオンでも待ってるよ.....!!」
どんどん沈んで、声を出すことも水に邪魔されて、届いてるのかわからないけど。
汐音の姿も見えなくなっちゃった。それでも確かに、汐音が最後に応えてくれた声は、わたしの幻じゃないと願ってしまいます。
「ありがと.....猫羽ちゃん」

結局、氷輪くんも兄さんも連れ戻せなかった。それだけじゃない。わたしはもう、わたしの名前がよくわからない。

これから先、またわたしがここに来れるのかもわからなくて。これで良かったのか、何かを間違えた気がして、わたしは必死にまだ水面でもがきます。

わたしが堕ちる黒い混沌に、案内をしてくれたヒトの無機質な声が響きました。
「言ったでしょう？ わたしも、強行策に出るって」

この闇の中で、わたしを導いてきてくれた混沌の影。でもわたしには、もうそのヒトのことも思い出せない。

だから、そんなわたしをすぐに帰したいんだ、って。それがわかりました。

待って、と。わたしはそこで、最後の声を振り絞ります。

——お願い。汐音が見つかるまで、待ってあげて。

わたしの望みを、わたしは無理には叶えなかった。それはシオンに、シオンの望みを選んでほしいと思ったから。

都合の良い悪魔のままでいい。わたしや時雨兄さんに何があろうと、シオンの望むこたえを探して——そう言いたくて。

たとえそれで、氷輪くんに会いたいわたしが、何かに変わってしまったとしても。

「.....貴女が大人しくしているのなら。それくらいは、待ってあげる」

良かった、と。

そう思ったところで、わたしの意識は、暗闇に還ったのでした。

-in spirit-

「靈」：Imanu'el

謡

親殺しのパラドックス。時間というものを科学的に考える人間界に来た時に、死神たる吸血鬼が興味を持った一つがその与太話だ。

もしも時間を移動できる「力」の持ち主 X がいたとして。X が過去に戻り、自らの親を殺せば X は生まれなくなる。しかしそう未来が変われば「親を殺しに来る X」自体が存在できず、X の親は殺されようがない矛盾が生じる。

これに対して、X が過去で親を殺せば、X がいた未来とは別に「X の親のいない世界」ができ、X が存在するための元の未来は変わらないとするのが並行世界の概念らしい。しかしその説でも、X の親が減る世界に X がそのままいる妙、世界全体の存在者の質量が変わる問題があるとされる。結局のところ、「時間移動は不可能」と結論するのが最も無難だという。

吸血鬼が知る、ある幻の中で、「自らが発生する世界を消す」少年がいた。だから吸血鬼はこの話に惹かれた。

普通に考えれば、少年が自らを消すには、少年の生まれる過去を変えなくては行けない。しかしあの少年はそんな「不可能」なことをしなかった。

少年はただ、「知って」しまったのだ。自らが存在しない世界は有り得て、自らが在る現世こそが幻であるのだと。

後に吸血鬼は、その幻の裏方となった天使の上司に尋ねた。
「『知った』だけで……それだけで世界って、変わるものなの？」

少年がいた世界を幻として、吸血鬼を少年のいない世界に引き戻した上司^{ナギ}。何かと吸血鬼に死神の仕事を頼み、人間界にも派遣した天使は、この頃から掴み所のない憂いを気配に漂わせていた。

「そうね。むしろ、時間移動という反則技なしの方が、世界は確実に変わるみたいよ。それが『観測者』と『神器』の引き起こすゲヘナ^{ゲヘナ}のさざなみ……世界の果ての炎獄が燃え上がらせる、新たな世界を消火する唯一の方法」

しかしつい先日、時を渡る力を持つ「悪神」が、消えた少年のいた幻の世界を再び現実にしてしまった。それは「悪神」が己を消すためで、望みを叶えてやりたかった吸血鬼は、幻だった世界を現実と受け入れた。

けれど「幻だった世界」は所詮、分岐でできた時空の伏流。「時を渡る」一つで、「悪神」や死神の吸血鬼が残る時空も消えない。

本当に今この世界を燃やすのならば、探すは「観測者」と「神器」。

「観測者」の目に映る世界こそまことの世界。その「観測者」に差異をみせる接点、世の矛盾が顕れた結晶が「神器」なのだ――

-in spirit-



寂

それならここで、賭けをしようか。

白^{しら}らな空に浮かぶ島で、死者のように眠る番人にその「悪神」は言った。

「あんた達は人形か、それともヒトなのか。オレに答を教えてくれる？」

先日「悪神」に心臓を奪われ、最早虫の息である番人は抵抗できない。

冷たい石の床に張り付けられる。その黒づくめの神剣で貫かれる瞬間を回避する術は無かった。

「周りを優先する人形か、己の望みを持つヒトか。その答を見届けるまでは……ツバメを返してやるよ——」

それは無用な賭けであるのに。天の鍵を突き立てられた番人は、声一つも返してやれない。ただ番人の全身を赤く侵していく、「悪神」の呪いが憐れだった。

人形かヒトか、答はもうとっくにしていること。「悪神」も気が付いているだろうに、おそらくまだ見ぬ新たな世界を望んでしまったらしい。

たとえ人形でもヒトでも、彼らに光ある未来などない。

それでも全ては、たった一人の過^{あやま}ちのため。その血を受ける者の全てに、炎獄^{ゲヘナ}の扉は開かれてしまった。

「『^{しおん}汐音』を救えるものは何？ 神でも悪魔でも、オレでもないなら——」

そもそも事の起こりは、人形の番人が守り続けてきたヒトの心。

探し求めた生きる理由に、その名が与えられた時のこと……。

_soul: 『白火』

世界は沢山存在してる。だから、^{しおん}汐音が望む世界を受け入れるよ、と紫苑色の髪でツインテールの少女が遠い紅の目で笑った。

そう言って常闇に迎えに来た悪魔使いの少女を拒み、送り返した冷たい水底。そこが最早、ゲヘナと呼ばれる火の池になったことを、闇に隠されたばかりの吸血鬼は知らなかった。

自らの闇に戻ったつमりの、吸血鬼を待っていたのは、思いもかけない現世での目覚め。

「あ、やっと起きた。本当にナギの言った通りだね。おはよう、汐音」

「.....え？」

突然開けた明るい視界には、見知った男児と知らない板目の天井。

ぺたぺたと、無表情な黒い目で黒髪の保育園児が頬を触る。自分が吸血鬼だとしかわからない吸血鬼は、まずつつこむべき現状を把握した。

「って、^{よくる}翼権.....!? 何で^{ユウ}夕鳥の中にいんの——!？」

「あ、やっぱりわかる？ まあ猫羽ちゃんの体にいればそうか。オレ達と似たように勘が良かったからね、^{ねこは}猫羽ちゃん」

「って——猫羽、ちゃんの、体.....？」

わけがわからないまま、がぼっと布団の上で起き上がると、端に座っていた男児が僅かに哀しそうに顔をしかめた。吸血鬼がそうやって、何の苦もなく起き上がったこと。それに安堵と悲哀が入り混じる顔だ。

そもそも目の男児は本来、魔力がやたらに強いだけの人間に過ぎない。その中身が何故か、吸血鬼が闇に隠される前にいた体の悪魔になっている。^{ひわ}氷輪翼権という、幾枚もの翼を持つ悪魔。汐音の名をもらった吸血鬼はその悪魔に飼われる一人格に過ぎなかったのに、何故今ここで、別のものとして対峙しているのだろう。

こたえは一つしかなかった。^翼翼の悪魔は黒髪の男児の体を、^{汐音}吸血鬼は紫苑色の髪の少女の体を、それぞれ勝手に使って向き合っている。

どちらも己の本来の体から離れている。だから現在、震える手で自分の体を確認する吸血鬼と、翼の悪魔は初めて体内以外で会話することになった。

やーばーいー。吸血鬼に真っ先に浮かんだ感想はひたすらそれだった。
「ちょっとマテ、これ本当に猫羽ちゃんの体!? うわマジだし、ていうかここ何処さ、こんな絶対ツバメに怒られるじゃん!？」

知らない畳の部屋で起き上がり、壁にかかっていた鏡に自分を映す。そこには確かに、心だけで引きこもった吸血鬼を闇まで探しに来てくれた、相方の妹の姿があった。

眠っていたので、髪の毛は普通のツインテールから下ろしているが、吸血鬼のいた世界でも珍しい紫苑色の髪と、ぱっちり睫毛の紅い目は紛れもなく「^{うつき}椴猫羽」のもの。吸血鬼が相方の「山科ツバメ」に頼まれ、この人間界で見守っていた人間の少女なのだ。

壁に食いつく少女吸血鬼の元に、とことこと、黒髪の男児が眠そうな顔でやってきてパジャマの裾を掴んだ。

「ツバメ、すぐ帰ってくるから、後の事情はそっちできいて。オレは眠るから、ツバメが帰ってくるまで夕鳥のお守りは任せたからね」

え? と聞き返す暇もなく、かくんと目を閉じた男児が床に崩れ落ちた。

今まで男児の体を使っていた悪魔が意識を落したのだろう。それでも気配はまだ男児の内から感じられるが、寝顔は素朴な保育園児のものに戻っていた。

わけがわからないが、勘が良いのは吸血鬼の以前からの取り柄だ。

とりあえずここは男児の家で、何故か「椴猫羽」がその一室で眠り、闇にいたはずの吸血鬼が猫羽の体を動かしている状況については確信できた。

「オレが猫羽ちゃん、翼権が夕鳥だって……? 夕鳥は普通に生きてそうだけど、猫羽ちゃんの気配、感じられなくない……?」

原因はわからないが、とにかく現状を把握していく内に背筋が冷えていく。

枕元に猫羽のスマホがあったので覗いてみると、そこには猫羽を心配するメールと不在着信の嵐が展開されていた。

「まだ八月か……オレが消えてから、そんなに時間はたってないんだ」

猫羽は高校に通うために人間界に来た異世界の少女なのだが、幸い夏休み期間中だろう。人間生活を学ぶためにバイトもしていたが、そちらはそちらで猫羽について相談しているのをメールで確認した。ややこしくなりそうなので、今はまだ関わらないと決める。

ほどなくして、玄関が開き、傘をたたむ音がした。

どうやら外は豪雨らしい。あちこち濡れたツバメが先に洗面所に入り、タオルで体を拭きながらまずリビングに入ってきた。

リビングと和室が繋がっているのは、確かに夕鳥という男児の家の一階だ。一度来たはずの家を思い起こしつつ、障子の隙間から、おそろおそろリビングを覗く。買って来たらしき物をテーブルに置いて、ソファに座るツバメが洗った足元を拭き直していた。

「汐音、目が覚めたのか。……何やってんの？」

「——何やってんの、じゃないし！ これ何、どうなってるの、ツバメ!？」

ツバメの妹の体を使う吸血鬼を見ても、全く動じた様子がない。あまりの呑気さに、逆に吸血鬼の方が動揺してしまった。ぼしんと障子を派手に開けて、立ち尽くしながら喚く。

「猫羽ちゃんどうなってるの、何でオレがここにいるの!? 夕鳥もさっきから全然起きないし、ていうか何でお前もこの家にいるの!？」

「それは多分、説明すると長いんだけど……とりあえず、外に出るから、これに着替えてほしいんだけど」

ツバメが買ってきたのは、女物の T シャツにスカートのアンサンブルだった。猫羽の制服をこの家の主——夕鳥の母の陽子が洗濯してくれ、その間猫羽にはパジャマを貸してくれたのだが、生憎の雨が続いて制服が乾かないという。

猫羽は昨日からこの家に泊まっている。目を覚まさないので、病院に行かないでいいの？ と心配する陽子をとりなし、起きたら教会に行くとツバメから言ってあるらしい。そもそも教会で倒れた猫羽をツバメが迎えに来て、何故かこの家に連れて来たという不思議な顛末を、とにかく着替える間にひとまず聞いた。

「……一応言っとくけど、猫羽の体に変なことするなよ、汐音」

閉めた障子の向こうで言うツバメに、はああ、と大きな溜め息が出てきた。そういう問題か、と激しくつつこみたくなる。

「別に——翼樞の体と大差ないから、気にならないし」

「……え？」

しまった。と思いつつ、猫羽の体をこうして使っている以上、その兄を安心させる方が先かと腹を決めて言った。

「言ってなかったけど、翼樞はそもそも女体型なの。そこにいたオレもむしろこっちの方が慣れてんの、だから何も変な気はないから」

「え……じゃあ、汐音達は女だったのか？」

「ちがーう！ そーいう特殊体型なだけで、遺伝子はれっきとした男！」

ソファで待つツバメは本気で面食らっているようだった。この状況で驚くのがそっちか！ とまた喚きたくなる。それでもとにかく、さっさと着替えて教会に行くしかない。

女物などわからないツバメが、適当に安い服を探したら子供用のような上下セットしかなかったのだろう。ひらひらのスカートを履くとさすがに足元の風通しが落ち着かない。面倒なので髪を両耳上で束ねるのも諦め、猫羽がいつも着けているリボンポケットにしまう。強い雨の中を歩くにはこの方が良さそう。

「夕烏も眠りっぱなしだし、詩乃^{しの}サンに預けがてら、そっちも相談すんの？」

「ああ。とりあえず猫羽——汐音が起きたって顔を見せにいく。猫羽が消えたのは自分のせいだって、ずっと自分を責めてたから」

教会にいる音戯^{おとぎ}詩乃は、おそらく隠れた神官の家系の異能力者だ。陽子の友人でこの家にもよく来て、生まれながら強い魔力を持つ夕烏を可愛がっていたことを知っている。熱心なクリスチャンなのに、悪魔の翼権と契約を交わした人間が詩乃だ。

今回、吸血鬼が消える時に体の主である翼権も眠りについたため、詩乃は猫羽が吸血鬼を探しに闇に行く手伝いをしたはずだが、その責任を感じていると見えた。

「じゃあ猫羽ちゃんは、闇から還らずにどっかに行っちゃったんだ……」

夕烏を背負ったツバメに続き、傘を持って扉を開けると、外はうっとうしくなるほどの雨天だった。

陽子から今夜は、夕烏を教会に預けるよう頼まれているという。ツバメは妹の体を使う吸血鬼に振り返らずに、淡々と呟いていた。

「それは俺のせいだから。汐音も詩乃も、何も気にしなくていい」

は？ と顔を上げる。背負う夕烏と傘に隠されて、ツバメの表情は見えなかった。無造作な短い髪が銀色である違和感に、吸血鬼は今更気が付いていた。

そう言えばそもそも、吸血鬼より先に「悪神」に隠されていたはずの相方。銀色の髪は「^{時雨}悪神」の色だったはずで、「ツバメ」は金髪に黒い目をしていたのに、今の青い目は「悪神」の金の眼からも遠い変わりぶりだった。

訪れた教会では特に情報は得られなかった。ただ、猫羽を心配して死にそうな顔をしている詩乃に、とにかく夕烏の体調管理をよろしく、と押し付けてきただけだった。

「あれ、ツバメが猫羽ちゃんを迎えに行かなかったら、大騒ぎになってたんだろね……」
「俺も驚いたけど、ナギに先に警告はされてたから。猫羽が連れて帰る汐音を絶対猫羽の体から出すな、そうしないと死ぬって」

どうやら猫羽は、ここにある体から猫羽という心だけが抜けている。吸血鬼——汐音の意識と、元々持っていた霧の精霊の加護で、主なしの体は辛うじて生きている。

ツバメなりに事情がわかる相手達とはすでに連絡をとっており、消えた猫羽の行方探しはもう頼んであるそうだった。

「それでオマエは、猫羽ちゃんの体と、それに憑くオレを守れって言われたわけ。そんなに納得してるの、オマエ？」

他でもない大事な猫羽のことなのに、ツバメの落ち着きぶりが汐音には不可解でならない。

夕烏を教会に預けた後は、今度は猫羽の下宿に汐音を送ると言うので、二人で駅から雨の坂を上がっていく。激しい雨に打ちつけられる傘の下で俯くツバメは、これまでに見たことのないような沈痛を浮かべていた。

「納得はしてない。でもできることもない。ここはいずれ崩壊するってナギが言った」「……へ？」

「こうして汐音と話せてることも、今の時間は全て幻だって。意味は全然わからないけど、何かが変なのはわかるんだ……汐音は感じない？」

ちょうど道端に公園がある所で、ツバメが汐音の方を向いて立ち止まった。

人間界では特殊なその公園を背にしているからかもしれない。不思議な神域に近い公園の手前で、猫羽の体の心臓も煩く波打ち始めた。

「変って……オマエがそうやって、諦めてるのも含めて、何もかもが変だよ」

「……」

「オマエはツバメ？ それとも時雨^{しぐれ}？ オレが消えてからオマエはどうなったの？」

よく考えれば、それが全ての違和感の発端だった。「汐音」が消える時、ツバメは「悪神」の時雨に隠された。汐音の宿っていた心臓を翼権から抉り出したのは時雨なのだ。

目前にいるのは、髪と目色が違うがツバメの気配だ。何故まだ「悪神」に隠されず、ツバメの意識を取り戻しているのだろう。

「翼権が夕鳥に憑いてることも含めて……オマエ達はあれから、どうしてたの？」

心臓を失った翼権は、この世界での翼権と言える鏡の夕鳥に翼を分け、そこから夕鳥の魔力をもらうことで命を繋いでいるはずだ。そのまま本来守るべき天の国に戻り、眠っていると思っていた。

ツバメは時雨化したままだろう。しかし時を渡る時雨の目的は、ツバメがそもそも「悪神」に隠されず、汐音も存在しない世界をこの世界と同期させ、運命を丸ごと変えてしまうことだった。それには汐音の存在が余剰物になってしまうため、汐音は自ら闇にこもることを決めたというのに。

「……世界は変わらなかった。それならオマエは時雨のままのはずなのに……何で戻ってこれてるのさ？」

その侵蝕は最早時間の問題だった。ツバメは本来、「悪神」として秩序の管理者をしなくてははいけない。ツバメの好きな山科鶇^{つぐみ}が生きている間くらい、ツバメとして生きる、と「悪神」の時雨がさぼっていただけの話だ。

力の弱るこの人間界にツバメを呼び、山科鶇から引き離れた途端、ツバメは時雨に成り代わられてしまったのだ。今、鶇の元に帰したならともかく、人間界にいるままツバメに戻れる理由が汐音には想像がつかない。

怪訝にしている汐音が不思議とばかり、ツバメの方は苦い顔で笑った。

「だから、俺も汐音も、猫羽が連れ戻してくれたんだろ。……猫羽がこうして、消えてしまうことと引き換えに」

そんなことは汐音もわかっている。詳細は不明にせよ、汐音が先刻から違和感を持ってやまないのは、猫羽の犠牲をツバメが認めていること自体だ。

「だからそれだって！ これ、オマエなら時雨になっても猫羽ちゃんを探しにいく場面じゃない？ オレを猫羽ちゃんの下宿にのんびり送ってる場合じゃないでしょ」

猫羽がどうなったのかはわからない。どう考えても、それは多分、猫羽に最後に会ったはずの汐音の責任だ。自然と声が荒ぶってしまう。

まだ降り続けている強い雨のせいで、珍しく真面目に傘をさしているせいで、半ば隠されたツバメの表情がよくわからない。

猫羽の体を、このまま守れと言うなら守る。それには汐音一人で十分だろう。猫羽が護身用に使っていた魔法の鎌も、スマホから取り出せるのを出る前に確認できている。だからツバメがここまで付き添う必要も皆無だった。

何も答えずに、無言でツバメがまた歩き出した。改めて坂を登り、猫羽の下宿のマンションが見えてくる。青い無表情で銀髪の後ろ姿は時雨のようにも見えた。

とにかく自ら猫羽を探しに行く気はないらしい。下手をすれば汐音が妹になることをとっくに受け入れている。だから自力で状況を解決しようとしていないのだとわかる。「もーっ！ そんなん本気でオレが猫羽ちゃんやっちゃうぞ、ばかー！」

びちゃびちゃと水を踏んで後を追いかけると、翼権の体にいた頃と比べ、人間の少女であることは何と身が軽いのだろうと思った。生来健康で運動神経抜群の猫羽ということもあるだろうが、以前は始終何処かに不調を抱え、身体能力の高さと引き換えに消えない渇きが体にあった。

汐音が宿っているせいか、猫羽の体の最奥から、同じ渇きが僅かに滲み出しつつある。それが猫羽の引き受けた吸血鬼の血の影響とは知らない。

帰ったらまず絶対、改めて事情をきいてやる。そう思っていたのに、猫羽の下宿に入るなり、リビングのソファでツバメは寝付いてしまった。

「.....このソファ、元々、オレ達の部屋にあったやつじゃん」

汐音もツバメも消えたので、猫羽が後始末をしてくれたのだろうか。彼らもこの世界に来る中継地点——橘診療所のお下がりでもらった家具だったが、汐音は気に入ってよく寝床にしていた。

「寄りたくないっていうから、診療所はスルーしてきたのに。オマエが眠るんじゃそっちに聴きにいくしかないじゃん」

眠っても髪が銀色のままのツバメ。そうしていると時雨にしか見えないのだが、横向きに丸まる姿はかなり疲れていることがわかる。

「まいったなあ、猫羽ちゃんの血を勝手にツバメに分けるわけにもいかないし.....てかさすがに嫌がるだろうし、全方位から怒られそう.....」

さて、ここからどうしたものか。ツバメの体調相談も含めて、橘診療所を訪ねるのは無難な選択に思える。院長の嫁である「ナギ」が汐音のことを言っていたというのだから、汐音が猫羽の体を使うこの状況については既に知っているはずだろう。

「でも.....寄りたくないってさ。理由くらい教えろよな、コイツ.....」

じーっと、床で膝を抱えて恨みがましく見つめても、ツバメは全く起きそうにない。

こうした時に、心から信頼して頼れる相手がいないことを、今更ながらに汐音は実感することになった。

「ナギも何考えてんのか怪しいところあるし……翼権の夕鳥は長く起きれそうにないし、猫羽ちゃん関係の奴らは下手したら怒られそうだし……」

この状況は汐音が望んだものではない。けれど責任がないかと言われると、至って怪しい。猫羽を闇から送り返そうとして、その後のことを汐音も何も憶えていないからだ。

初めて「汐音」として、目が覚めた時によく似ていた。何故自分がここにいるか、あの時も全くわからないまま、なしくずしに状況を受け入れていた。

「……ツバメにはああ言ったけど、この体でホントにシャワーとか浴びていーのかな、オレ」

することがないので、猫羽のパジャマを探し出し、ついでにバスタオルなどもしっかり置き場所を確かめた。雨で体が湿気ているので、温かいお湯を景気よく浴びたい。

「まあ、いつまでこのままかわかんないわけだし……それまでずっと、お風呂入らないわけにいかないし……」

猫羽はほそっこい見た目のわりにしっかりしているが、根が妹キャラなので周囲には可愛がられている。この状況で吸血鬼にキズモノにされたなどと言う者はいないだろうが、責任を取れと言われたら自分は取るだろうか。しばし考える。

「むしろそんぐらいしないと、アイツずっと一人身かなあ……うん、迷うことなかったかも？」

やはり怒られそうな結論しか出せなかった。考えても無駄なことはやめにして、ツバメが起きないのが悪いと決め、バスタオルを取って洗面所に向かった汐音だった。

猫羽がこのまましばらく起きないとすれば、人間の体なら食事をとらなければいけないし、この家での生活費もきちんと考えなければいけない。

シャワーも浴び放題ってわけにはいかないな。と珍しく真面目に検討しつつ、思い切って上着から服を脱ごうとしたその時だった。

——……待ってたよ。『オレ』の併せ鏡。

「って——へ？」

洗面台の鏡に、何故か猫羽でなく、汐音そのものの姿が映っていた。

翼権が優位な時の青闇の髪に、猫羽と似た細身の平坦な体幹、狭いなで肩。上のボタンをはだけた白いカッターシャツ。違うのはツバメのように、目が黒いことだろうか。

何これ、珍しいこともあるもんだなあ、と。

ぼかんとしながら見つめていたら、鏡の自分が天使のように整う顔で笑った。

猫羽の下宿に、人外生物の干渉にしても、こんな子供だましの仕掛けがあったのだろうか。それはともかく、猫羽が失踪した手掛かりにはなるかもしれない。

何だおまえ。と淡々と返すと、何の悪戯かもわからない鏡像が、よくわからない目的を訴えてきた。

——オレをここから出して。そうすれば願いを叶えてあげるから。

「.....オレの願い？　猫羽ちゃんを連れ戻してくれんの？」

目前の相手からは大した「力」を感じない。人間ほどにも脅威ではない。

だから猫羽について、何かを探りたかっただけなのだが——

——それは無理だよ。だってオレはセイで、セイはシオンの影なんだから。

「へ.....？　セイって誰？」

あまりに心当たりのない話題に面食らった。それでなくともわからない現状が、ますますこじれてひねくれていく。

——シオンが望むなら、ツバメをずっとここにいさせてあげる。だからオレも受け入れて、シオン？

意味がさっぱりわからなかった。それでもこうした、望みを叶えると言う呼びかけそのものは、吸血鬼の頃の己を思えば相手の意図はわかる。

「おまえ.....猫羽ちゃんみたいな悪魔使い？　猫羽ちゃんと昔、契約した翼権みたいにオレをはめて、何をさせようって言うのさ？」

この状況からは、それぐらいしか思いつかない。わかるのは目前の相手にほとんど「力」が感じられず、人間にしか見えないことだけだった。

悪魔と契約できるのは人間だけだ。猫羽と初めて出会った頃に、それで一介の吸血鬼から本格的に悪魔になった翼権を汐音は知っている。

本来悪魔と人間の契約は、悪魔が人間の願いを叶え、代償に人間の魂を奪うものだ。しかし猫羽は特殊な悪魔使いで、「悪魔の願いを叶えるために悪魔の力を借りる」ことを主契約とし、基本的に悪魔のために動く代わりに、自身の魂も渡さなかった。そして猫羽が契約を交わす悪魔は、叶わない願いを持つ者ばかり。翼権越しに知ったことだが。

返答を待っていたが、鏡の自分は穏やかに笑うだけで真意を言わない。

これはまず、捕縛方法を考えるべきか。どうしたらこの鏡像を固定できて、ツバメが起きたら見せられるか、悩み始めた直後のことだった。

——……こっちに来て……『風漓』。

何も知らない心の間をつく。これほどそれが妥当な状況はない。

「風漓」という唐突な名前。その霧の精霊を宿す猫羽の体が、汐音の意思とは無関係に硬直した。

——一緒に……ここから出よう？

嫌だ、と言おうとした。けれどそれは、とてつもなく残酷な拒絶であると、本能的に猫羽の左手が自らの口を塞ぎにいった。まるで猫羽は、その精霊が「外に出る」邪魔をしたくないと言うかのように。

わけがわからず戸惑う内に、鏡からうっすらと黒い手が差し出された。

指以外を包むびったりとした黒手袋は、確かに吸血鬼の頃の自分が大事にしていた形見の一つだ。

空いた猫羽の右手が、勝手に上がった。

「……ツバメ……！」

鏡の手をそのまま迷わず取ってしまう。これがとてもまずい事態ということだけは、汐音の全存在で感じ取った。

今の時間は、全て幻。つい先刻のツバメの声が、脳裏に蘇る。

——ここはいずれ崩壊するって、ナギが言った。

全ては何となくでしかない。しかしこの鏡の自分——「セイ」を、猫羽に見せてはいけなかった。それだけを汐音は悟る。

これが猫羽の見つけた望み。そのために猫羽は自ら消えたことを、引きずり込まれる鏡の中で高鳴る胸に自覚させられる。

「ちょっ、まっ……！ オレはそんなこと——……！」

猫羽の内の汐音だけが、謎の闇へ連れ込まれるならともかく。

猫羽の体ごと引っ張られ、周囲が黒く染まる現状に汐音はまだ抵抗を諦めなかった。

「——猫羽ちゃん！ オレの望み、待ってくれるんじゃないの……!？」

それは猫羽の性格を考えればわかる。鏡に映った者の悪魔使いのような挙動にしても、体が勝手に動いたことにしても、これは猫羽が起こしている何かのはずだ。

猫羽なら必ず、良かれと思ってやっている。汐音自身も気付いていない、胸の奥の小さな望みの芽を掬って。

「オレは猫羽ちゃんに叶えてほしくない——自分で見つけて、自分で叶えたいから……！」

どんどん黒塗りにされていく世界が、そこで僅かながらおし止まった。

猫羽の体を使う汐音の、足元だけがライトに照らされたような形で、真っ暗な世界にそのまま降り立つことになった。

とりあえず、何かに引きずられるのは止まった。ほっと息をつく暇もなく、手前にもう一つライトスポットが現れる。

呼吸を整えようとしていた中、え。と前を見る。そこにやがて、足側からすっと幕が上がるように、一人の影が映されていった。

黒い闇の中、拙い白の蝋燭のように、二つの人影が浮き上がっていた。

猫羽の姿をする汐音の前に、もう一人用意された暗闇の住人。見覚えしかない冷たい笑顔に、猫羽の声のまま汐音は眩いていた。

「何で……翼権じゃ……ない？」

「……………」

そこに立つのは明らかに、以前は汐音が使っていた吸血鬼——数多の翼を持った悪魔。

しかしその目の赤が、以前の蒼とは遠い色だ。翼権である時は青をとことん暗くしたような青闇の黒髪も、心なしか紫の艶があるように見えた。

そもそも翼権の意識は先刻まで、夕鳥の体を使っていたはずだ。ここにいる者は実体として感じられ、眠る翼権の本体だけだと思えば納得がいく。

「オマエ、誰……何で、翼権の体を使ってんの？」

「……………」

敏い汐音に喜ぶように、僅かに赤い目が細められた。

この何者かに体を奪われたから、翼権は夕鳥の体に遷ったのか。黒い手袋をしているので、鏡に汐音を連れ込んだのも目の相手のはずだ。

しかし心臓のない吸血鬼の体を、どうやって動かしているのか。何故わざわざそんな効率の悪いことをするのか、と真っ暗闇の中で訝る汐音に、抜殻の吸血鬼が青白く笑った。

先刻までの黒い目の「セイ」とも、ここにいる赤い目の吸血鬼は違った。どちらにしても本来の汐音と同じ顔なのに、これまでの自分とは似ても似つかぬ穏やかな微笑みを浮かべている。

状況がわからない以上、下手に動くことはできない。恨めしい思いで睨めっこをしていると、赤い目の吸血鬼がやっと口を開いた。

「……賭けが、始まったから。オレはこれから、水門を開く」

「——え？」

「もう逃げることはできない。ようこそ……ゲヘナのさざなみへ」

それは懐かしくも、声変わりしていない「翼権」とは違う聞き知った声。

誰の声色か思い出せないでいる間に、赤い目の背後を覆い尽くすように白い炎が立ち上がった。広がる白のまばゆい背景に、スクリーンのようにある一風景が映し出された。

白らな空に浮かぶ島で、死者のように眠る番人に、その持つ神剣を振り上げる黒づくめの「悪神」。

——あんた達は人形か、それともヒトなのか。オレに答を教えてくれる？

「って——……時雨……!？」

気付いたそばから走り出しても、間に合うわけはなかった。

汐音が置いてきてしまった吸血鬼の体が、冷たい石の床に張り付けられるよう、黒づくめの神剣で一息に貫かれた。

「待てよ、時雨……！ 何で……何で——っ……!？」

映される白い炎の中で、成す術もなく、吸血鬼は灰に戻っていく。

もう汐音が帰る体はないこと。その現実を伝えるのに余りある真っ白な空。

だから翼権は夕鳥の中に来るしかなかった。そして、本体を失った意識はおそらく、消えゆく寸前だから起きていられないのだ。

「翼権を殺る必要なんてないじゃん……！ それなら最初から、オレを奪った時に殺せばいいだろ——！」

汐音がこうして、闇に再び連れ込まれたことも気付かず、ツバメはリビングで眠っている。果たしてこのことを知っていたのだろうか。

——答を見届けるまでは……ツバメを返してやるよ。

時雨が光景の中で言ったこと。その吸血鬼は、人形なのかヒトなのかと。

——『汐音』を救えるものは、何？

何であれ、心臓のない吸血鬼に未来などない。汐音もわかっていた。

それでも全ては、たった一人の過ちのため。その血を受ける者の全てに、炎獄の扉は開かれた、と赤い目の吸血鬼が改めて言った。

「猫羽は汐音の血を引き受けてゲヘナに行ったよ。オレがこうして、ここに現れることができるために」

黒に戻った世界の中で、気付けば汐音は一人残され、崩れ落ちていた。

赤い目の吸血鬼の姿をする者が、誰なのかわかってしまった。だから猫羽が消えたということも、理屈ではないところで真実が伝わる。

己が心臓を失ってすらも、天の番人を続けた吸血鬼。先程にいたのは空っぽな彼の、眠る目を赤く染めた誰かだ。

それはかつての、翼権の師匠の赤い鼓動。時雨がその残滓を引き受けて、剣の内に宿されていた者。

その赤の目に映る今後こそ、これから出会う世界の形を決める、とわかってしまった。

——ただ、汐音の望むままに。あんたと翼権が、選ぶこたえは何？

そもそも事の起こりは、人形の番人が守り続けてきたヒトの心。

探し求めた生きる理由に、その名が与えられた時のこと……。

-please turn over-

_spirit: 『赤火』

鏡の自分に取り込まれかけ、途中で微妙に引き留まった。そのあと置去りにされた黒い世界で、汐音は猫羽に宿る霧の精霊に会うことになった。

霧の精霊である娘。元は翼幢の師匠である何でも道具屋の精霊使い、^{たつきラクト}竜牙烙人を幼くした同じ顔の双子で、早逝して烙人の扱う精霊となった娘だ。

大きな紫苑色の目と長い髪で、「風漓」^{かざり}と名乗る桜色のショールの娘は、病弱そうな長いスカート姿で、途方に暮れる汐音の手を引いて暗闇を歩いてくれた。

「ごめんね、アナタをここに巻き込んじゃって。出口は私もわからないけど……一人にはしないからね」

悪魔使いの猫羽を魔の侵蝕から守るため、烙人は猫羽に精霊を遺した。「風漓」の名がついたのは最近だろう。精霊がいるならここは「力」の闇の何処かのはずで、猫羽の体で目覚める前にいた「天龍」と大差はない闇だ。

むしろどうして、猫羽に宿る精霊かつ「天龍」設計者である風漓が、天龍でなくここにいるのかが不可解だった。暗いので自分の姿もわからない汐音の前で、生前の旧い服らしき風漓の全身は、妙にはっきりと見える。

風漓には汐音がどう見えているのだろうか。先刻までとり憑いていた猫羽の姿か、それとも翼の悪魔の姿だろうか。

「力」の本拠、時の闇で出会うものは、互いの縁^{えにし}次第で姿を変える。たとえば風漓が生前の姿に見えるのは、烙人に死神の翼幢が関わっていた頃、死霊の風漓を葬送するか悩んだからだ。その時に烙人から感じ取っていた風漓のイメージが、おそらくここでは再現されている。

「……あのさ。何で風漓は、ここにいんの？」

これは汐音が発した問いだが、風漓が手繰る縁が違えば、猫羽が尋ねたように見えているかもしれない。そもそも風漓が汐音を迎えに来る理由もなく、今回猫羽の体を汐音が使って、初めて出会った相手とも言える。

神性と直観を併せ持つ猫羽や時雨、または「天龍」が浮かぶ混沌の管理者橘桃花^{トウカ}であれば、大体誰でもありのままの相手が見えるだろう。だから汐音は猫羽に見つけられた。また猫羽を混沌の水底に送り返した。

汐音自身は、縁者なら闇の中でも相手がはっきり見える程度。おそらく風滴が霧の精霊の本人であることは間違いないが、それだと余計に、何故面識のない汐音の元に現れたのかが何もわからない。

いったい風滴は誰を連れて、何処に向かっているのだろう。

一人にしないから。最初にそう言った遠い笑顔を、受け取るべきは汐音ではない。その確信が今も汐音を落ち着かせない。

——風滴。一緒にここから出よう？

鏡の自分がそう言った時、あの何者かは「セイ」と名乗った。それならその先で出会った風滴も、汐音をそう見ているのが自然に思う。誰のことかはさっぱりわからないが、そもそも風滴のことも汐音は知らない。

けれど風滴は、どうしてここにいるか尋ねた汐音に、気安く困ったように笑う。

「……説明は難しいんだ。でも、私はこうしてないといけないから」

これは心を開いた者に出る反応ではない。特に鏡の自分が相手ならば、あの馴れ馴れしさに対して不相応な緊張感だ。

要するに、優しいがほぼ初対面の汐音として接されている気がする。そういう細かなことを尋ねようとすれば、何処かへ逃げてしまいそうな臆病さも感じて聞き難い。

繋がれた手から、流れてくるのは親愛と罪悪感。

これは風滴から話してくれるのを待つしかない。大人しく腹を決めてついていく。翼権が時雨に灰に戻されたこと、赤い目の翼権が現れたこと、猫羽の行方、気になることは山とあったが、焦ったところでどうせ取り返しはつかないのだから。

しばらく歩くと、見たことのある暗い公園に出た。猫羽の下宿まで送られた時、ツバメが立ち止まったあの公園だ。

ほっとしたような風滴が、雑木林の中にある和風の休憩所の前で笑う。

「……ここなら、時間を気にせずにお喋りできるよ」

暗闇からとにかく人間界に出た。昼のベンチがある休憩所は、夜なので一つだけ白熱灯が点き、自分の姿が見えるかと思ったのだが、何故か視界は霧がかかったように薄ぼんやりとしていた。

「ここはこういう所なの。私が誰か、アナタが何か、そういう思いはどうでもよくなる。観てるのは烙人だけど、選ぶのは猫羽だから……私達は何もできないの」

「……え？」

確かに風滴が言うように、自分が汐音という自意識が、先刻よりもぼやけつつあった。

けれど風滴は、誤魔化したいわけではないらしい。わざわざこの公園の性質を教えなければ、汐音は知らずに自我を手放していたかもしれないのに。

「猫羽は、汐音の望みを探してるんだよ。だからさっきも、途中で汐音を引き込むのをやめたでしょ？」

そしてあっさり、おそらく大事な種明かしをされた。やはり風漓は汐音を汐音として、大した縁もないのに正しく認識できているのだ。

何も隠したいわけではなさそうだった。風漓はただ、どう話せば汐音に上手く伝わってくれるか、入り組む事情を説明する言葉を必死に探している。

「何で、オレのこと知ってるの？ 風漓って……猫羽ちゃんの精霊だよな？」

猫羽ですらも、「汐音」を知ったのは翼権を探しに闇に来てからだ。吸血鬼の姿から翼権と呼ばれるならともかく、汐音の名を知る者は少ない。

それだけ汐音は最近生まれた。汐音自身も、自分が誰であるのか知らないと言える。

だから風漓も、きっと話し方を悩んでいる。汐音が何をわかっていないか、その範囲からして風漓もさっぱりなはずだ。

「オレは風漓に会ったのは初めてだと思うし、ききたいのは翼権がどうなったのか、猫羽ちゃんが何処にいて、烙人に一ちゃんがどう関わってるかだけだ。これ、風漓にきいてもいいことなのかな？」

なるべく疑問を具体化してみる。納得したような風漓が表情を少し崩し、いいよ、と笑って頷いてくれた。

「そうだよな。初めまして、だよな。汐音も翼権も、昔の烙人に似てるから、初めての気がしなかったの。ごめんね」

どうやら緊張感と混在する気安さの理由はそれらしい。烙人の内に精霊としている頃から、風漓は吸血鬼の彼を知っていたと言う。短い期間でも翼権は烙人の弟子だったので、風漓の言い分は何も無理がない。

そう安堵しかけたところで、思わぬ爆弾発言が汐音を襲う。

「汐花しおのかさんが焼き餅焼きだから。私は氷輪ひわ翼権にはほとんど関われなくて」

……は？ と、咄嗟に、脈絡のわからなかった汐音の思考が止まる。

「汐音はどうか？ 汐音は翼権と汐花さんの子供みたいなものって聞いたけど、汐花さんの影響は全然ないの？」

意味がわからない。そう思いながら汐音は、ツバメも不思議がっていた理由のない勘の良さで結論に飛ぶ。

まず汐花とは誰か。風漓の話しぶりからは、翼権が長い間探す慌て者の天使しか思い浮かばない。そもそも翼権がこの人間界に来たのは、かつての命の恩人であるその天使を探してのことだ。

それと翼権の子供が自分とはどういうことか。まず実体のない天使や、吸血鬼の翼権に子供など有り得ない。強いて言えばツバメに血を分けたことが血縁を作る行為だ。

けれどもし、翼権の心臓に宿っていた自分が、彼の血から生まれた心なら？　そして心の素になったものが、翼権が預かるあの天使の羽だとしたら……。

何だ、簡単な話じゃないか。それなら翼権とは別に汐音が存在できる理由もわかる。納得しかけて、いやいや、と内心で派手に首を振った。とりあえず動揺は全て飲み込む。

風漓の言と、自分が飛びついた推論は何処かずれている気がした。そもそも汐音が翼権の記憶から知る天使には、汐花という名などついていないのだ。

ならばそこは尋ねるしかない。風漓が想定している世界と、汐音を知る世界とは何かが違う。

「汐花がオレの親って……どーいうこと？」

「え？　だって、翼権と契約してた猫羽に、汐花さんが憑いて生まれたのが汐音だよね？」

ますますドツポにはまった気がした。わけのわからない話ばかり。絡まる現実是一つずつ解くしかなく、とにかくここがおそらく、時空のレベルで異所だとまず理解する。

それも汐花という、有り得ない相手が存在する異所。過去にも翼権は、似たような夢を見たことがある。暗闇の先はとんだ夢幻世界だったらしい。

猫羽に汐花が憑いて生まれた汐音。とんでもない設定を口にする風漓に、それは嬉しいことだと見えた。

「私、汐花さんが猫羽に憑く場合、うまくやれるか心配だったけど……それで汐音が生まれるなら、何だか兄弟みたいで嬉しくって」

「……汐花が、猫羽ちゃんに憑く場合？」

「ここではまだ世界は選ばれてない。猫羽が勝てば、汐花さんは猫羽に取り込まれて汐音が生まれる。猫羽が負けたら、汐花さんに^{シングル}紫雨を取られる。私は結果を待つだけなの」

「え……それじゃ、まだ結果が出てないなら、ここにいるオレは何なの？」

私達には何もできない。風漓がそう言った意味はわかりつつ、話すほどに汐音の混乱は深まっていく。

「これから、近い内に生まれる可能性がある命は、時の闇に先に現れるって烙人が言ったよ。だから私、汐音を見つけてすぐにわかったの。アナタは、猫羽が同じように消える別の世界でも、私と一緒にいてくれた『シオン』だって」

ここまで聞いて、こちらの発言の方が大きな爆弾だろうと、首を傾げて二秒で汐音は気が付くことになる。

「猫羽ちゃんが同じように消える……別の世界？」

先刻、猫羽の体で汐音が目覚めた時の状況と近い。そんなことを口にする風漓は、ここが今の汐音にとって、異所の時空であることもわかっている。それで説明が難しい、と悩んでいたのではないか。

夕音でなければとてもついていけない話だが、風漓はあっさり認めるように先を続けた。

「烙人が観ているものは私にも伝わる。烙人の代わりに猫羽はゲヘナに行ったの。そうすれば烙人の観るさざなみの世界を、夕音のために選べるようになるから」

「オレのために……猫羽ちゃんが世界を選ぶ？」

気が遠くなるほど訳のわからない話題。なのに夕音は自らが、この夢幻のカラクリをわかりかけていることが怖かった。

「烙人兄ちゃんが可能性を作る……時雨みたいに色んな世界を覗き観る。猫羽ちゃんはその中から、オレが望む世界を探してる……ってこと？」

こくり、と頷く風漓の静かな表情に嘘はない。たとえ猫羽が消えてしまう世界であっても、猫羽が選ぶ烙人の世界なら受け入れる、その決断が垣間見える。

何故烙人や猫羽にそんなことができるか、それはさっぱりわからないが、「ゲヘナ」という単語が関係しているのだろう。猫羽一人の選択で世界の有様が変わるなら、それは紛れもない地獄の沙汰だ。

風漓が夕音から目を離すと、休憩所の外の暗い夜を見やった。

「烙人が生きていたら——そもそも、私のせいで消耗しなかったら」

夕音がいた世界では、八年ほど前に消えた烙人。神隠しで時雨になる前の紫雨に、命の残滓を残していった。化け物にしては若くして衰弱したのは、この霧の精霊を維持していたからだ、死神時代の翼権も知っていた。

「烙人という泉を涸らして、霧の私が生まれる世界。烙人が烙人である限り変わらない運命……でも、私達と同じ、水門を司る母様が小波を起こした」

「……？」

「私と烙人を、母様はゲヘナの奈落に捨てたの。選べる世界を、猫羽が可能な限り遡ったから」

風漓が言わんとしていること。それはあまりに言葉足らずで、闇に包まれた木々のように漠然としている。

それでも夕音は大局を察せてしまう。悪魔をやれる夕音と翼権は、そんな直感が以前からある。

「じゃあ、このヘンな世界を最初にもたらしたのは、風漓と烙人に一ちゃんのお母さん。それも猫羽ちゃんにそそのかされて……そういうこと？」

猫羽の起源を辿っていけば、風漓達の母と関われる時間もあるらしい。風漓は無表情に頷き、暗闇を見つめる紫苑色の目を潤ませた。

「時雨には見つけられなかった、烙人と汐花さんが存在できる世界。烙人が奈落から這い上がれば、消えなくなった烙人が汐花さんを助ける。でも代わりに、紫雨に殺された翼権が灰に戻ってしまう。だからここでの汐花さんは、翼権を助ける方法を探しているの」

それであれば、この異所と汐音のいた世界の共通点は、灰に戻された翼権——そもそも灰に戻す時雨だろう。そうして違うはずの時空の共通点を接点に、時雨はこの異所を引き寄せたのか。

時雨の剣には烙人の赤い鼓動が残されていた。貫かれて赤火を受け取った翼権が、赤い目——ゲヘナの烙人となり、同じように翼権が消える様々な異所に猫羽を渡しているのだ。煮え立つ火の池の水門が開かれ、打ち上げられた新たな流れへ。

「うっわあ……泣きそう。桃花ちゃんに相談したい。今ほどそれを思ったことない」
炎獄^{ゲヘナ}は世界を包む混沌の果てと言われる。「天龍」管理者で混沌接続者の橘桃花がいれば、汐音も介入できるかもしれない。

しかし風漓が汐音に視線を戻し、残念そうに首を振った。
「橘桃花もここにはいない。烙人に会ってないから、桃花の形を取れてない」
うぎゅう。八方塞がりか、と両手を座面について項垂れた。

猫羽がゲヘナに消えて翼権が灰に戻り、烙人と汐花が現れる世界。
猫羽はそれを選択に入ってしまった。それも汐音の望みを探すために。
「オレが猫羽ちゃんを説得したら、ここは何とか変わってくれる？」
呼びかけたら届くのもかもしれない。「汐音の望み」を猫羽は覗いているはずだ。ところがそれこそ難儀だと、風漓の幼気な顔が曇った。
「翼権はこっちを望んでるよ。汐花さんがいる世界なもの」
猫羽にとって、汐音と翼権の重みは同じだろう。翼権が消えても猫羽と汐花から汐音が現れる世界であれば、どちらの望みも叶えられる、と思っていそうだ。それはあながち間違いではなく、更には猫羽は、根が頑固だ。
「汐音に他に望みがあれば、聞いてくれると思うけど……それはある？」
ぐ。と鋭い風漓に言葉に詰まる。猫羽だって無闇にこの行動に出ているわけではない。

今もぼやける自身のままで、汐音は空しい抵抗しかできない。
「……押し付けハンターイ！ もらとりあむ希望ー！」
「猫羽も本当はそう思ってると思う。でもうかうかしてると、ナギってヒトの望む未来に連れていかれるんだって」
「え」
「ナギは烙人をあるべきところに戻して、汐花さんのことは保って、紫雨にも違う力をつけさせようとしてる。悪神やさぎなみの私達に、これ以上好き勝手はさせないって」
うそうそ。殊勝な風漓に全力で首を振った。
「要するに風漓達に汚れ役をさせて、ナギの一人勝ちじゃん、それ。汐花を保つなら、猫羽ちゃんはこのまま消えてしまうの？」
「……」

「紫雨をもってことは、悪神から助けるのもツバメでなくて紫雨なんだ。それはハンターイ。オレの望みと言うかは微妙だけど、ツバメが消えるのは、オレは見過ごせないし」

汐音にとって、ツバメは最も優先すべき「鍵」。その心がどうしてあるか、いつから生まれたかはわからず、胸を張って望みとは言えない。

何気に観察力がある風漓は、汐音の迷いを見事に汲み取って返してくる。

「それは本当に、汐音の心？」

ツバメが消えるのは見過ごせない。当たり前にある「鍵」への想い。

「汐音はそう造られただけじゃない？ 翼権が『翼』の想いで汐花さんを探すのと同じように、汐音も誰かの都合でそう想ってない？」

風漓は本当に、「翼権」の事情をよく知っているようだった。

がっくりしている汐音の前で、桜色のショールを押えてベンチから立ち上がり、そっと視線を合わせてしゃがんだ。

「汐音も翼権も……誰かの望みを映す人形のまま？」

「……——」

「それは尊いことだと思う。でも……私も猫羽も、汐音の望みが見たい」

たった一つだけで、汐音を照らすには足りない白熱灯の下で。

風漓の深い紫苑色の目には、猫羽の下宿の鏡と同じ黒髪の汐音が映っていた。

——一緒にここから出よう。

望みとは何なのだろう。生まれた理由、造られた目的とも違うものだろうか。

為すべきを成さずに何を望む。義務ですらなく、ただ生き筋だけがそこにあった。

風漓の言う通り、翼権が汐花を探す本当の意味も、汐音がツバメを鍵にした目的も、彼ら自身から生じた意志とは断言し切れない。

何かを大切に想うことに、理由は必要だろうか。理由が存在している想いというのは、その時点で功利や打算の結果でないのか。生き物が愛し合い、子孫を作り守ることも、より生き易くなり、己の遺伝子を残すための本能の人形と言ってしまう。

考え出すと袋小路だ。それなら所詮、ヒトなど全て神の木偶に過ぎない。

意志や望みを持っているなんて思い上がり。たまたま生まれた環境の中で、与えられた条件で育ち、個々の仕様と出来事の中で成形が変わる。

「心」なんて何処にあるのか。持って生まれた己の素質を、生き物っぽく見せる多様な反応でしかない。そんな答が汐音の脳裏を駆け廻る。

畳に爪が食い込みそうなほど、気付けば指に力が入っていた。

「……オレが、造られた命、だから」

何がいったい、己の声を沈ませるのがわからない。「人形」であることの何処が問題なのか、それからして「汐音」にはそもそも答がない。

「造られた目的に従えば……オレは、人形？」

冷たい夜の公園の中、一か所が浮き上がるような休憩所で、黙って汐音を見つめる風滴の前で。

今の汐音が思いつくこと。ツバメも翼権も猫羽も消えないでほしい、それは叶わないのか、とふと思った。

「……オレは何も、不満なんてなかったのに。何でナギや猫羽ちゃんは、わざわざ世界を変えようとするの？」

ちょうど梅雨の頃、悪神の時雨がツバメを乗っ取り、汐音と翼権は表舞台から退場することになった。猫羽はツバメと翼権を助けに来たのに、何故「汐音」の存在に拘り始めたのだろう。

このさざなみが荒れる嵐の根幹。それを尋ねた汐音に、風滴はいっそう悲しげに両目を潤ませた。

「……山科ツバメが……汐音のいる世界を願ったから」

「——え？」

「猫羽が本当に叶えたいのは、そうだね……ツバメと汐音の望み、だと思う」

それは言いたくなかったらしい。けれどここまでの汐音の察しの良さに、隠すことはできないと風滴も瞬時に悟っていた。

何だ、と、不思議な決着があった。それならあのバカを止めればいい。

汐音が猫羽の体で目覚めた時から、ツバメの挙動はおかしかった。ツバメが汐音を優先するなら、猫羽も意向を汲んだのだろう。

それはダメだ、と頷く。ツバメと汐音は猫羽を見守るために人間界に来たのに、本末転倒になってしまう。

「——ねえ。オレをツバメの所に、連れてってくれる？」

「……………」

「ツバメの主人は実際、オレじゃなくて翼権だしさ。ツバメが守るべきは、猫羽ちゃんや山科の家なんだから」

何が望みか、ときかれたら、汐音に言えるのは一つしかない。このおかしなさざなみを早く、元の静穏へ戻してやること。

それが人形の望みかどうかは知らない。「元の静穏」がどういう世界かもわからない。ただ、汐音が退場し、翼権が天で眠る現実に特に変化は必要ない。ツバメは時雨になるかもしれないが、それもツバメの姿の一つだ。

この「賭け」そのものを起こさなければいい。時雨がわざわざ、翼権を灰に戻さなければ、猫羽もゲヘナの扉をくぐらないのだ。

簡単で自然な結論を、あえてややこしくするのが「さざなみ」らしい。
風瀧は残念そうに笑い、すっと立った。少し歩くよ、と言って、長く話した白い明かりの休憩所を後にしたのだった。

そして汐音は風瀧に連れられ、もう一人のさざなみが待ち受ける赤い池沼、ゲヘナの
一画に拙く踏み込む。

ツバメと赤い目の^{格人}翼権と、猫羽の体に取り込まれた汐花。
広い自然庭園の片隅、小さな川べりで対峙する三者を見てしまった時、あ、だめだこりゃ。汐音は己の間違いを悟った。

——何だ……楽しそうじゃん？ 格人に一ちゃんも、翼権も……例の、汐花も。

いずれ消えゆくさざなみとして、仮初めに姿を顕した彼らを、一度たりとも見てはいけなかった。

特に汐花。見た目はほぼ猫羽であるのに、闇に映える雪白の髪を目にして、自分でも驚くほどの安らかさが汐音を襲う。

翼権の姿をしたさざなみ。赤い目の格人が、ツバメに何某かの是非を尋ねる。
「『汐音』を救えるものは何。オレの答はこの世界だけど、オマエは？」
汐音が説教するまでもなく、ツバメは既に圧倒されている。
彼らが佇む小川から少し先の、水が流れ込む小池で汐音は立ち止まった。それ以上近付く気になれず、遠目から眺める汐音が赤い水面に映る。
翼権の残滓とも言えそうな、幼げな格人。茫然としているツバメに容赦なく続ける。
「オマエにも答があったんだろ。汐音がヒトとして、そのまま生きられることが汐音の幸せに見えた。時雨もツバメも——違う？」

人形かヒトか、答を教えてくれ。そう問うた時雨の姿が汐音によぎる。
「じゃあオレは言う。オレも汐音も、この世界を成立させるための人形である方がよほど幸せ。この世界が紫雨を取るなら猫羽を捨てて、猫羽を守るなら紫雨を捨てる。オレはどっちでもいいよ。それがこの世界であれば」

それはきっと、風漓の言ったこの異所の裏側の実状だった。

——猫羽が勝てば汐花さんは猫羽に取り込まれて、猫羽が負けたら汐花さんに紫雨を取られる。

理解する必要はなさそうなものの、猫羽と汐花は、紫雨の扱いを巡って争うと見える。どちらにしても汐花は残り、猫羽の体に汐花が宿る場合は、守られた紫雨はそのまま残る。汐花が勝ち紫雨が奪われた場合、猫羽の存在は残って紫雨が何か違うものになる。

今のところ、そこにいるのは紫雨でなくツバメだが、このさざなみが固定してしまえば彼は紫雨になるのだろう。

汐花が求めるものは多分、紫雨が奪った翼権の翼だ。紫雨の内に翼権の翼があり、翼権の姿をしている者は汐花にとって烙人なら、紫雨を翼権に変えたいのだろうと何となくわかる。

相変わらず勢いだなあ、あいつ…… 雪白の髪に苦笑混じりにそう思ったのが、果たして「汐音」の心なのか、遠目で立ち尽くす吸血鬼にはわからなかった。

翼権の烙人に問い詰められて、答えられないツバメが憐れに見えた。

ツバメは自身の思いを言葉にするのが苦手だ。考えていないわけではなく、むしろよく考え込む方だ。それ以前に何故、翼権の烙人に問いただされるかがわからないはずで、時雨のせいといえど大きなとぼっちりだろう。

ただ、「汐音」が続くことを願う。それ以上でもそれ以下でもない。

ヒトだの人形だの、そうした話に拘ったのは時雨なのだ。どうして外野は皆、単純な願いを難しい話にしたがるものか。

「……どう考えても、時雨のせいかな。アイツは何で、オレ達がヒトか人形か、そんなに悩むのかな？」

思わず呟いてしまう。汐音とまだ陰にいる風漓が、同情するように小川の方を見ながら言った。

「ヒトとしての望みを見つけないと、汐音がいなくなるから、じゃないかな。汐音はすぐに、誰かの望みを映して変わってしまう人形だから」

「……」

この場に来てすぐ、汐花の存在を見て心が変わった。そんな汐音の移ろいやすさが、時雨は気に食わないとでも言いたげの話。

「確かにそれこそ汐音だけど。ツバメや猫羽が探すのは、翼権でもツバサでも紫音でもない、汐音なんだと思うよ」

また難しい話になってしまう。言う通り汐花の存在を喜ぶのは翼権——ひいては彼らの本体、つばさの心だろう。最近生まれた汐音は実際、その天使に会ったこともない。「でも、翼権やつばさが喜ばばいい、それもオレの心とは言えない？」
「.....そうだね。汐花さんと本来、一緒に存在できない汐音にはわからないはずだよね」

小川からは見え難い場所に隠れる汐音の斜め後ろで、今も寝間着のような服装の風滴が俯いた。

汐音はツバメ達の成り行きを窺うので精一杯でもある。だからそこで、風滴に起きた変化をおし止めることはできず——

橋の方では、汐花憑きの猫羽を受け入れるか、猫羽を戻したいなら、汐花の要求を受け入れて翼の竜を選べ、と謎の選択をツバメが突き付けられていた。

どちらにしても、この異所の時空からは出られない。詐欺だ、と悩むツバメを、援護するか説得するか、汐音が本気で悩み始めた時のことだった。

汐音の背後で、赤く見えていたはずの池が青く変わった。

ゲヘナのような夏夜の熱気が変じた。空気の異変にはすぐに気が付き、振り返った汐音を待っていたもの.....それは今も橋の方へ、汐音が近付けない本当の理由だった。

つい先ほどまでは、紫苑色の髪と目をした娘がいたはずの平地で。

祈るように両手を組んで、青い水面を背にする長い雪白の髪の人形がそこにいた。

「.....っ」

あまりの動揺に思わず後ずさった。悲しげな紅い目が見据える汐音にも変化が訪れる。

今まで意識はともかく、己の姿がよくわからなかった汐音であるのに、この瞬間には明らかに猫羽の体になった。それはきっと、目前の雪白の人形と対峙すべきが、猫羽であるからだった。まだ赤い世界の小川の方には、汐花が憑く雪白の髪の人形も存在しているというのに。

「何で.....汐、花.....？」

猫羽の姿になった汐音を、風滴だった雪白の髪の人形が紅い目で見つめる。日本にしては長いシフォンスカートが、風もないのにふわり、と広がっている。

夏場なのに足首を隠したショートブーツ。柔らかで長さの違うツインテールの下、天女のように桜色のショールを羽織る雪白の髪の人形。

「.....これが、氷輪汐花。ここでの私と汐音。私も汐音も、ここでは裏方だから」

意識の変わらない汐音と同じように、風滴も中身は変わっていない。

それでも汐音は、雪白の人形の姿に体が震えた。その感情は喜びでも恐怖でもなく、ただ激しく、胸が痛くなった。

「どうして汐花さん、ここでは消えないと思う？ ……私が烙人と一緒に、翼幢が連れる汐花さんを守るのがこの世界なの」

雪白の娘の顔は、確実に翼幢がよく知る天使と同じだ。この世界では本来、こうした人形型の高度な依代を使うのが汐花なのだ。

猫羽に汐花の気配を感じるだけでも心が変わったのに、こうも間近で懐かしい目を見ると、汐音という意識が一瞬で吹き飛びそうだった。

「でも私、悲しかったよ。翼幢に悲しんでほしくないから、汐花さんを頑張らせて守ったのに……汐花さんがいると、探し続ける願いのない人形の翼幢は、いずれ闇に還ってしまうから」

できるだけ、頑張ってみる。消えた天使とそう約束し、死神となって必死に生き繋いできた吸血鬼。

そうでもなければ、敵が多い生まれの吸血鬼は滅びていくという。天使と吸血鬼が二人共、末永く幸せな世界はないのかもしれない。

「ここでの私は猫羽を守っていない。汐花さんのために存在して、汐花さんが猫羽に遷った時に、初めて私を自覚する」

「……え？」

「猫羽の中に潜む可能性……シオンが私の形をくれるの。汐花さんが猫羽に負けて存在が消えかけた時、汐花さんがいない私達の世界に、私とシオンはやっと繋がる」

灰に戻った翼幢の存在——それを行うシグレ、ひいてはツバメが、汐音の元いた所とこの異所の接点であるように。

汐花が消えれば、汐音と風漓が表舞台に立つ更なる異所が別に現れる。それはもう、望めばすぐそこにある、と風漓は言った。

「烙人と私が、汐花さんを守らなかった世界。汐音はこのまま、汐花さんを望む？ それとも私と……私と一緒に、その世界でヒトにならない？」

この異所の存続を選ぶなら、汐音は誰かの望みを映す人形。

しかしその最後の選択を望むなら、それはヒトの答、と言わんばかりで。

「汐音はヒトだし、ヒトになれるんだよ。……本当だよ？」

汐花が守られないなら、汐音がその道を選ぶのは自身への裏切りだろう。つい数分前まで、汐花の気配に安らぎを感じた自分も本当なのだから。

それであるのに、風漓の声に耳を塞げなかった。汐花の顔で差し出された手を、とても胸が痛いのに凝視してしまう。

ここから出よう。あの鏡の自分と同じ誘いを、風漓はついにかけてきたのだ。

「そんなの——……オレ、は……」

その手を取りたい。己の心と矛盾する咄嗟の衝動。

そんな揺らぎこそがヒト、と汐音は知らない。寄せては返す感情の波。水底に溜まる澱みを浮かべ、己を濁らせていくさざなみ。

打ち寄せ溢れ出す魂の高鳴り。その音が何処からくるのか、ただ、この胸の底を知りたい、と不意に祈った。

沈む心をかきたててくる、風の名を持つ娘が、差し伸べた手を拙く震わせていた。

「私はずっと……ずっと、貴男に会いたかった」

人形の目であるはずなのに、じわりと揺らぎをたたえる紅い硝子。

誰がいったい、誰に向かって言っているのか。風滴と汐花、どちらの声かも妖しくなった昏い誘い。

雪のように冷たい霧が、夜の淵から漏れ出していた。もう猫羽の体を使う自分も見えなくなって、領海が白く霞まされていく。

「……心を、開いて」

その呪が^{しゅ}おそらく、最後の一線となった。

誰かがずっと、汐音に呼びかけていた。それはただ、助けてほしい、と——

——赦してほしい。その声が聞こえてしまったから、汐音は薄れゆく心の中で扉を開けた。

洩れ出でるのは、白い霧夜に混ざった小さな光。それだけがここでは必要なのだと、祈りを知ったかつての悪魔に、小さな死神の願いが満ちていった……。

-please turn over-

_anima: 『黒火』

当たり前のように失ってきたから、失くしたものを深く思うことなんてなかったんだ。自分でないようにかすれた声で、気づけば細く呟いていた。

痛みはいつもそこにあるもの。探すことだけはやめずにいても、何を見つけないかもわからなかった。

消えたヒトの鏡像を見つければ、もう一度会えると思ったのか。中身が何でも良かったのなら、似た者には既に出会ってきた。そのヒトでなければ駄目であるなら、それはもう何処にも存在しない。わかりきった願いを、どうして探し続けたのだろう。

そこが位置的には日本の中央部であると、「彼」は突然思い出した。

目が覚めたのは、ランクが高めなマンションの一室。猫が飼える条件で彼、茨月^{しづき}惺^{せい}はその部屋を選んだ。結局飼わずに今日も独りきりの寝床で体を起こした。

茨月惺は開業医の家に生まれた。忙しいが優しい両親、何不自由ない生活がとても恵まれたものだ知っている。医者の家をつぐ——進学校に行くために、高校から一人で親戚のいる都会に住むことも、何一つ疑問など持たなかった。ただ、両親の望むように自分は生きないとわかっていながら、親元を離れたのは狡^{ずる}かったことも自覚がある。

高校は始まってほどなくドロップアウトした。地頭は良いらしく入学までは何とかだったが、昔から勉強は嫌いだった。田舎で他にすることがなかったからやれた。

両親は当然帰って来い、と言ってきたが、バイトに明け暮れて都会に留まっていた。順風だったはずのレールをあえて降りたのは、惺の内には生まれつき理由もなく、「日常なんて簡単に崩れる」思いがあったからだと言える。

「……え？ ……オレ……？」

夜中までのバイトで疲れた体。はああ。と溜め息をついたところで、「彼」はその違和感にすぐ気が付いていた。

「え……ちょ、まっ……まさかオレ、これって……」

ぺたぺたと、両手で自分の頬を触る。肩口から首の後ろだけ不精にのびした黒髪。
「いや、いやいやいや……『惺』って誰だよ、何で当たり前におレなのさ、また何処に来ちゃったわけオレ……？」

「彼」の自意識は「汐音」であるのに、体は勝手に「慳」の記憶を起こす。
うっかり自分が、「慳」だと思いかけた。日常なんて簡単に崩れる、ほら、こんな風に。
汐音のはずの頭の中で、慳がそう笑った気がした。

「待て待て待て……何これ、オレ、日本に生まれて一人暮らしのフリーター設定？」
鏡から話しかけてきた「セイ」が、とりあえず誰かはやっとわかった。
ここがどんな世界であるにせよ、「慳」は汐音という前提。体を使える以上、大部分が
同質の存在であるはずだ。そもそもどうして翼権の内に生じたのかもわからなかった汐
音が、人間として日本に生まれたら慳だったのかもしれない。
それにしても現状は、納得いかないことだらけだった。
「ていうか散々、オレは汐花の羽から生まれたって振れ込みだったのに、今までのあれは
何だったのさ。ていうか、だから、この体……—」

汐音のはずの自分に気が付いてから、絶え間ない違和感が体にあった。
当たり前のことなのに、汐音はそれに「違和感を持つ」こと自体にショックを受ける。
「いや、それって……でもオレ、これ……」

慳としての記憶を辿ってみる。でなければまずこの世界のことがわからない。
これまでの経緯を考えてみれば、何かを接点にまた違う時空に引き込まれたのだろう。
それなら先程までいた汐花のいる異所と、ここをつなぐはずの接点……先刻までの世
界と同じものが、最低一つはあるはずなのだ。
「ヒトとして生きられるって言ってたし、普通に風漓が接点ばいけど。慳は風漓とどうい
う知り合い？ 何でその辺、モヤがかかってんの？」

人間として育ってきた^{自分}慳については、おおまかなことなら思い出せる。なのに現在、汐
音が使う体において、意識を閉ざした慳の心は感じ取れない。

まるで慳が閲覧を許した記憶だけを知れているようで、思わず汐音は、猫羽の部屋と
同じ建物とわかる洗面所にまず足を踏み入れた。

「向こうにあったカレンダーだと、ここは猫羽ちゃんが十六歳になる直前の日本で……
^{オレ}慳は高校をやめてもうすぐ一年……猫羽ちゃんと慳は同い年なんだ、一応……」

鏡の中には、翼権の時のような黒髪。見慣れない黒の目の青年が、不安そうに汐音を
見つめ返している。

「猫羽ちゃんもだし、ツバメ——時雨はいるの、ここ？ 誰に会ったらわかるかな……一
番近くにいそうなのは夕鳥？」

猫羽が時の闇に彼らを探しにきた時、夕鳥の存在は時雨が翼権の心臓を過去に持ち込
んで生まれたものと説明されたはずだ。逆に言えば、夕鳥がいるなら時雨もいる。

汐音も「天龍」で同じ話を聞いた。汐音という意識そのものが、夕鳥から呼び起こさ
れるものだと。汐音の自意識があるところでは夕鳥も存在している可能性が高いだろう。
「でもその場合、翼権はやっぱり終了コース？ それともここにいるのはオレでなくて
セイで、オレはこれから消えるなら夕鳥はいないかも？」

部屋に戻り、クローゼットを開けると、汐音の趣味とは思えない白いコートが入っていた。寒いのでと羽織り、鍵の入った鞆を机に見つけ、財布と鍵を持って外に出る。

夕鳥の家——真羽家と、夕鳥がよく預けられる教会は、どちらもこのマンションから大差ない距離だ。教会に音戯詩乃がいれば、翼権と関わりがあるかも確かめられるため、最初は教会に向かうことにした汐音だった。

まずは駅前まで続く、緩やかな傾斜の無機質な下り坂。

立春の寒気が弱小な人間の体に打ち付け、縮こまってしまうせいか、歩く度に先刻の違和感が気になって仕方なくなった。

「あー……これ、やっぱ微妙……なってみてわかるものってあるね、翼権……」

それはおそらく、汐音と翼権には想像し得ない体の違和感。こんな話をわかってくれそうなのは翼権しかいないが、この世界にはまず存在しているのかどうか。

「オレだけ日本に生まれるって、凄く微妙な状況だよな……翼権が何かで殺られてそれで、生まれ変わったのが慳って方が、しっくりはくる……」

翼権の体に棲む一つの人格として、春先に己を自覚した頃の汐音は平和だった。慳の記憶をたぐるとわかるが、「一人の人」として生きていくのは、人間は結構面倒くさい。「親にいい顔しつつ、周囲と上手く付き合いつつ、勉強やらバイトやらを頑張って、毎日学校や仕事にいくのって『普通』なんだ……前からできる気はしなかったけど、慳はむしろ、高校入学までよく我慢できたね？」

そこには慳の複雑な心があった。医者など社会的ステータスの高い家は何かとプレッシャーが多い傾向にあるようだが、慳にはそれ以前の問題が生時からあったと見えた。

日常なんて簡単に崩れる。当たり前のように失ってきたから、痛みはいつもそこにあるもの。それは慳の胸裏を常に離れない確信だった。

思い出せる範囲で何かを失ったわけではない。ただ慳が生まれる前に、胎内で一緒にいたはずの双子が消えたいらしい。それはきっと自分のせいだ、と漠然と思っていた。

憶えてもいない双子を求めていたわけではない。けれど何か欲しくて、探すことだけはやめないでいても、何を見つけたいのかもわからなかった。

「その点で言うと、オレや翼権は楽だったよね。翼権はツバサを、オレはツバメを守ればそれで良かったから」

汐音も翼権も、言ってみれば本体である「翼」の影だ。役割があるからその体において、それ以外のことは悩まなかった。

対して慳は、役目など決まっていなはずの人間として生きる傍ら、理由のわからない衝動に追われ続けた。その一つがここでの暮らしらしい。

「慳は何でこの街に来たのかな。考えようとするとなんもわからなくなる」

選んだ都は、「親戚がいるから」という理由だ。しかしそこに世話になるわけではなく、大して親しい親戚でもない。

猫羽がいる街を、慳は偶然選ぶだろうか。おそらく話ができていない。

そもそも猫羽がこの場所にいるのも、一年だけの短い間なのだ。そのタイミングぴったりにわざわざ一人でやってくるとは。どう考えても慳は、猫羽——もしくはその内に在ると思われる霧の精霊、風漓に会おうとしていたのではないのか。

しかし、どうやって。

何故見も知らぬ猫羽達を目指して、嫌いな勉強を頑張れるのだろうか。

何が慳を焚きつけたのか、その答こそ、今目指している教会で汐音を待ち受けていた。

そのことに汐音が気が付いたのは、赤い煉瓦に囲まれた建物の中から、凡庸な住宅街に薄くしみわたる歌声が聴こえてきたからで——

“この歌に身をゆだねて。音の波に深く沈んで”

それに気付いたのは「汐音」だった。紛れもなく風漓と詩乃の声だ。汐音をここに呼び込んだ呪^{しゅ}。

この世界に二人がいたとして、汐音の知る声色をしていると、どうして断言できるだろうか。だから慳が思ったことではない。

“心の底から溢れる気持ち。震える風の音はどこから来るの？”

音戯詩乃には「歌物語」をヒトの意識に刷り込ませる力がある。それをこれだけうすすら広げているのは、「霧」と呼ばれる風漓の影響だろう。

二人がいったい何をしているのか、汐音は何故か戦慄を覚えながら扉を開ける。

何処かで予想していた通り、その礼拝堂にいたのは、制服の猫羽と地味な普段着の詩乃だった。猫羽がいるのでなければ、風漓は単体ではおそらく存在できない。

しかし案外、予想していなかったもの。祭壇の前で十字架を見上げ、並んで歌う猫羽と詩乃を長椅子で見守る、翼権としか思えない黒髪の学生姿があった。

「——え？」

慳として存在する汐音とは別に、翼権は何の瑕疵もなく命を続けていたのだろうか。羽が幾枚か足りない気配がするが、元の世界と同じように、ツバメや夕鳥に渡した後であれば是非もないことだ。ただしその場合、心臓もなくして眠っているはずなのに。

驚く間もなく、「慳」としての意識が突然、汐音を隠すように浮上してきた。

歌う二人と、座る学生。扉を開けた白いコートの慳に、三人が当然のように歓迎の心に向けたせいかもしれない。

「.....約束通り来たよ、オレ。詩乃サンと風漓.....それに、猜^{さい}」

自分の口が知らない名前を紡いだ。汐音は咄嗟に驚愕するが、慳は何もお構いなしだ。

黒髪の学生服の青年が立ち上がり、ゆっくりこちらに振り返った。

その目は汐音に否応なく、時の闇の旅路を思い出させる炎獄の赤火。扉の前で立ち止まって待つ慳に、赤い目が月のように優しく笑いかけた。

「.....ご苦労様、慳。『汐音』をここまで連れてくるの、大変だったろ」

確実に翼権の体でありながら、声は若い頃の烙人のもの。汐音も烙人のことはよく知らないが、それがゲヘナの「さざなみ」の使者.....一つ前の異所でツバメを問いただしていた、翼権の烙人と近いことはわかった。

おそらくあの異所から、この慳の世界に汐音をよんでいた者。黒幕とっていいだろう存在に、汐音は全霊で警戒を纏う。

しかし慳の体は、その労いに安らぎを感じ、顔が勝手に穏やかに笑った。

「オレは猜に出会えて良かった。それでたとえ、オレが消えたとしても」

赤い目な翼権の烙人は、ここでは「猜」らしい。「さい」の響きは心当たりがある。

もしも由来があるとすれば、翼権が本来名乗るべき故郷の名のアナグラムだろう。翼を本体とする彼らが、吸血鬼として復活させられる前の、人間の子供だった頃の名前だ。慳と併せれば「再生」なんて、タチの悪い冗談のような語音ができあがる。

たった今まで、猫羽と一緒に歌っていたはずの詩乃が、ふっと消えた。

慳が視線を猜に遷した一時のことだ。慳と猜と猫羽——風漓。このさざなみの三人が集う場には、神性の家系であるだけの詩乃はそぐわない。しかしその退場が何か大事なことを意味するように、汐音には感じられた。

ここで確かめなければいけない。慳の口にした不穏な言葉も含めて、汐音があえて体を使おうとすると、慳が抵抗することはなかった。

「.....慳が消えても、って、どういうこと？ ——猜」

後端の扉の前と、最前列の椅子の横で、汐音と猜は互いを見据える。猜は汐音が別世界での自意識で、慳の体を使うことまで織り込み済みでそこにいるのがわかる。

「オマエ——猜は、烙人にちゃんと翼権の合いの子、みたいな感じでいいんだよね？」

「少しだけハズレ。オマエが感じる通り、オレの体は翼権で、中身は大体烙人だけど」

無意識に睨みつける汐音に、まるで女性のような柔和さで猜が笑った。

『オレ』は元々、殺された人間の子供の怨念。そして烙人の赤の鼓動は、ツバメを保つためにいるから.....ここにいる『猜』は、意識だけでも生き延びるためにオレに血を吸わせた烙人と、水雷の狼、桃花ちゃんの怨念」

とてもあっさり説明された複雑な事情に、汐音は思わず膝をつきそうになった。吸血鬼である翼権が、もしも烙人の血を回収したなら、それでなくても自意識が曖昧だった二人が混ざり、意味不明な存在には充分なり得る。烙人は我が強いように見えて、ある悪魔の鏡映しなだけの心だった。

翼権の精神状態が以前通りなら、烙人の血を吸ったりしない。そこにおそらく烙人を残したい桃花が関わっているはずで、「猜」は翼権と烙人、そして桃花の悲願と言える。

そして猜は、ここにいる「慳」の願いも汐音に告げる。

「慳は汐音になりたがってる。汐音の望みを叶えるのが慳の願い。その慳の体で、この世界で生きることを受け入れれば、汐音は本当にヒトになれる」

それは決して、続くのは「慳」の自意識でなくて良いと言った。慳を全く知らなかった汐音は、その理由がわからずに猜を睨むことしかできない。

まるでこれが、全てのこたえ合わせだと言うかの如くに。

柔らかく微笑む猜の隣に、風漓の顔付きをした猫羽がそっと立った。

「茨月君……セイはずっと、男のヒトになりたかったから。紫音でなくて、汐音になること——それが唯一、セイを過去ごと変えられる救いなんだよ、汐音」

は……？ と。思考の止まった汐音に、風漓が悲しげに笑う。

「わからなくていい、でも汐音もそうだったよね？ 自分は氷輪翼権と同じ体に生まれた心で——汐花さんの羽の影響で、女の子にはなりたくないって」

ぐさり、と、当たり前の弱味を突かれた気がした。

言われてみればその通りだ。わざわざ意識したこともないほどに、汐音にとって自身は「男」だった。同じ体にいる翼権の同胞で、たとえ山科ツバメを大事に想うように作られていても、男のままで「相方」でいたかった心。

けれど今、慳の体に違和感が消えない。そして汐音の基盤となった羽は、いつしか別の想いを訴え始めた。それがきくと、汐音とツバメのずれで、猫羽を巻き込んだ元凶。

「汐花さんは——その羽は、山科ツバメが好き。ツバメが奪った、つばさの心が好き。汐音はそれに抵抗してたんだよね？ それは恋とか愛とか、そういう好きじゃないって」

「——……」

「それは汐音の思う通り。汐音はただ、自分が楽しいから……一人じゃなくなるから、ツバメと一緒にいたかったんだって」

心臓が、小さく刺されるように痛んだ。

言葉にされてしまえば、何と身勝手なこと。ただ言われるだけで痛いことなのだろう。「でも汐花さんの羽は違う。ツバメが他に想う人がいること、それが辛くて一人占めしたい感情……その名前は、『嫉妬』だよな？」

淡々と話す風漓。言うことは全て、猫羽が見つけた答の代弁に聴こえる。

「それは『鍵』の心というより、汐花さんが汐音に残した、『罪』だと思うよ。汐花さんの忘れ形見の橘水葵が、『嫉妬』を象徴する悪魔なのと同じように」

——きっと、知っていた。

紅い瞳の天使が水葵を使役できたのは、生前の血筋と、その罪を宿す者だったから。おそらく羽に宿る心の残滓が全てを認めていた。

「汐音がその汐花さんの罪に負けたら……ツバメに沢山犠牲を払わせることになる」

汐音が自分では理解できずに、時の闇に行こうとした真の理由。翼権を犠牲に、心臓を明け渡しても時雨の誘いに乗ってしまったのは、風漓の言うことが妥当の気がした。

「ツバメは、汐音がもし望めば全てを捨てるって、汐音はわかってたよね？ だから何も言えなかった。汐花さんの人形でなく、汐音のままにいたために椀時雨の手を取った。時の闇に打ち捨てられて、全てを失った時雨と、汐音の望む形で相方になるために」

「汐音が望む形の相方」。それは汐音が心も体も男になることだ、と風漓は言っている。男性の慳がいる世界は、だから必要なのだと。人間の男性な慳の体に汐花の羽はなく、羽の影響を完全に断ち、汐音として独立できる道と言える。

それが最善であるかどうか、猫羽は測れていないと見えた。汐音の望みは慳——男性になることか、それとも汐音自身が見出す望みを待って、この闇路を見せたのだろうか。

風漓の話は明晰で、何も間違っているとは言えない。汐音が自身を理解できるように、極力わかりやすく話してくれた。

ここでの風漓は、慳という人間を愛し、猫羽の体を借りてでも、人間界に留まることを決めた悪魔らしい。それを可能としたのはおそらく、猫羽に出会い、悪魔を扱う術の手ほどきを受けた慳だ。

このまま慳が汐音になれば、風漓の想いはどうなるのだろうか。風漓は猫羽の体を完全に奪う気はなく、それでいいと思っている。風漓も慳も、猫羽と汐音の体の中で契約を行い、ひっそり思い合って生きていくのだと。

気が付けば今一度、汐音は両手を強く握りしめていた。

「……ツバメは、オレの『鍵』だから」

何がいったい、己の声を沈ませるのがわからない。「慳」になることの何が問題なのか、今の違和感以外に「汐音」には答がない。

「汐花の心を切り離せたら……ツバメを、守れる？」

一度、口にしてしまうと、何故かじわりと涙が溢れ出て来た。

この涙は誰の想いなのだろうか。汐花の羽が訴える独占欲を、本当は持ちたかったのかもしれない。自分だけでは抗い切れないから、時雨の誘いに乗ったと言える。

泣いているのは、汐花を探し続けた翼の心だろうか。惶である汐音にその心は宿りようがないのに、次から次へと止めどなく涙がこぼれる。

「ごめん、風滴……風滴の言うこと、凄くよくわかるのに……それは多分、『オレ』の望みじゃないと思う……」

「……—」

汐音が涙し始めたその時から、風滴の表情は僅かに目を見開いて止まった。つまり風滴も予想しない反応だったらしい。

「オレ自身は——汐音は、汐花に会ったこともないのに……羽の力に、心の欠片に縛られてるなら、オレはやっぱり人形だと思う……それでもオレは、オレだけのために、汐花の羽を手放したくはない……」

もしも今、己の心を言葉にできるとすれば。

ただ、淋しくて仕方がなかった。それだけだった。

たとえ自分が、その羽の主の人形であっても、ヒトもそもそも神の木偶だ。汐花の羽が彼らの運命を狂わせても、振り回されることを汐音は選んだ。

黙り込んでしまった風滴と、俯き震える汐音の姿に、猜が訳知り顔で笑った。

「——まあ、わかってたけど。汐花の羽を捨てろなんて、オマエに受け入れられるわけがないって」

「……」

「とって、ツバメに悪影響が及ぶのも許せなくて。だから汐音は、時の闇に引っ込んでるのが無難。更に言えば、惶の体になるのも正直微妙。これはまあ、翼権の女体型に慣れ過ぎた弊害かな」

くすり、と笑った猜に思わず顔を上げた。

ここに来るまで、翼権に話したい。と思ってならなかった違和感を、目の怨念は察してくれているらしい。

深い黒瞳に映る者の現状を、視通す直感を持っていた桃花の影響かもしれない。桃花の怨念も引き受けたという猜が、赤かった目を黒く染めて汐音を見つめていた。

「たとえ自分の存在を闇に隠すことになっても、汐花もツバメも、汐音は切り捨てられない。それは翼権——つばさがずっと、汐花を探し続けた理由と同じ」

「……え？」

「わからない？ とても簡単なことなだけけどさ。大事なものは全て、等価に大切な水輪翼が、汐花とツバメだけは特別だって定めた理由」

そこでぎゅ、っと風漓が猜の腕に寄りかかった。
それは風漓が、汐花に勝てない理由だ。汐音がここで、惶になると思うほど風漓を想わない現実がある。

風漓は言えなかったことを、哀れむような猜があえて明るみに出した。おそらくそれは、ここまで捻れたゲヘナのさざなみを終わらせるために。

「汐花は思い込みが強いんだよね。優しいヒトだったけど、一度好きになれば地の果てまで追いかける執念も持ってる。ツバメはツバメで、仕える主が基本一番、自分より大事っていう壊れた奴だからね」

え。頭が真っ白になる汐音も構わず、猜は続ける。
「オマエは人形か、それとも鏡か、空の白火か。何であれ自分を特別に想うものを特別に扱う、その強い光を映す水月がオマエ達だから」

要するに、一番好きになってくれる人を最も好きになる、そんな身も蓋もない話に聴こえた。それで言えば風漓の場合、惶以外にも大切なものが沢山あるのだろう。

「その在り方が、人形の性だと悲しむのは、時雨や猫羽の勝手」

「……………」

「時雨は汐音と遊びたがってるけど、汐音に仕えるのは自分の勝手ってツバメはわかってるし。猫羽ちゃんの今後も含め、あのバカをどういなしてくかは、汐音がじっくり悩めばいいこと」

ふふん、とそこで不敵になった猜は、翼幢にも烙人のようにも見えた。

「汐音は、猫羽になりたくはないの」

「——え？」

「初めの世界に戻りたいんだろ。それが汐音の望みのこたえじゃないの？」

この一連のさざなみを終わらせること。始終それを思っていた汐音に、猜は最も容赦なく核心をついた。

「猫羽になれば、遠慮なくツバメの傍にいていいし、どれだけ大事に想ってもいい。オマエ達がほしいのは、ずっとそれだけ……家族だよね？」

遠い日に、烙人は弟子の吸血鬼に同じことを言った。

その時の生まれたての翼幢には、よくわからなかったこと。あっさり口にする相手に思わずちんときてしまった。

「それじゃ、猜は——烙人に—ちゃんは、この世界が続かなくていいの」

ここはやはり、烙人が唯一残る世界なのだ。でなければそんな汐音の望み、ひいては氷輪翼の体に棲む者達の心を総括できない。

やっとな桃花と共にいられるはずの烙人が、黒い目のまま遠く笑った。

「諦めを残した結末より、探し続ける希望の方が、オレは好きだよ」

その言はつまり、この世界も、烙人の望みには足りないと言わんばかり。

相変わらず強欲だ。翼権は決してしない幸せそうな笑顔に、汐音もようやく闇から目覚める決心がついた。

タイミングを測ったように、背後の扉から風が吹き込み、礼拝堂が暗転していった。

闇に眩む聖域に、ちらり、ひらり、と見落としそうな薄い光が舞った。

一瞬で消えていくように、白く風に煽られていく花。その意味を感じた途端、胸を貫く温かな痛みと、大切な誰かの微かな泣き声が聞こえた。

——アレルヤ——

教会に来た時とは違う、幼げな重奏。その声にも詩乃が人に刷り込む言霊しゅの呪が潜む。礼拝堂から消えていたのに、誰の心を詩乃は歌っているのだろう。

本当は疑問に思う間もない。彼と詩乃の縁を繋いだものは、たった一人、紅い瞳の天使だけなのだから。

胸の泣き声が治まるまでに、完全に暗闇と化した周囲の中で。

ぼつんと鏡の中にいた彼——教会まで白いコートを羽織ってきた惺が、俯きながら立ち尽くしていた。

この闇の旅路に汐音いざなを誘った者。人間界では珍しいだろう本物の悪魔使いが、汐音の胸を揺さぶる断末魔をそこで発した。

「……そっか。汐音は……惺オレにだけは、なってくれないんだ」

あまりに悲しげで痛切な惺の声。——助けてほしい。

人形の性でありながら、惺の望みは映さない汐音を断罪する悲痛。

そのこたえを返すのは躊躇われた。

それでも汐音は口にするしかない。彼は元々、人の悪魔を狩る死神だったのだから。

「……そうだよ。だってそれが、オレ達の望みだから」

悪魔は人間の願いを叶える。死後の魂を悪魔のものとする代償に、人間が自分でもできない望みの夢を見せる。

その最たる望みを彼はよく知っていた。人間が悪魔と契約する時、一番多く見る夢は「死にたくない」走馬灯なのだ。

「ここでのお前は死者だよ、セイ。……知ってただろうけど」

日常なんて簡単に崩れる。本来生まれる双子の命を使い、闇に堕ちるはずの黒火が無理やり生まれ出た世界。

だから慳は、汐音として生者になりたかった。悪魔使いとなってまでも。

黒闇の中、汐音の手元から小さな光が顕れる。慳が泣き出しそうな顔で笑った。

汐音、ひいては翼権は、本来「葬送」の鍵を継いだ死神だ。黄泉の扉を開けて死者を送る。死者が何処に還るかは誰も知らない。

黒い手袋に纏わりつく光が「葬送」の鍵。消えた天使から預かる羽の光で、汐音の元となった祈り。この世界に来る直前、最後の扉を開けた光が、慳を送る役目のために宙に舞っていた。

それでも汐音は――

「.....烙人に一ちゃん達と一緒にいなよ。オマエだってまだ、自分の居場所を探しているんだ」

それは彼だから言える背信。元は天使の役割たる「葬送」を担う彼が、悪魔、死神と呼ばれる所以がここにある。

彼は神に救っていない。だから神の所与である「葬送」を使えど、神の戒め全てに従うことはない。いつかそれで彼が滅んだとしても、自業自得。だから彼はまだ、神というやつを好きでいられるままだと思える。

闇に慳の黒い髪と目が融けゆく寸前、誰かが慳の手をひいた気がした。

ほっとしたので、汐音も目を閉じる。これは要するに、性質の悪い悪魔祓いの一つだった。

ここから目を覚ます世界が、きっと本当に、汐音が望む戻るべき世界――

目覚めて第一声が、詩乃の謡の消去動作だった時、汐音は特別驚かなかった。
「ほら、手を握って開いて、体をのばして、息を大きく吸って。ゆっくり時間をかけて、しっかりと吐いてね——」

明るくなった礼拝堂で、詩乃の膝枕で長椅子に横たわっていた。

椅子の前ではツバメが心配げに膝をつき、眠る者を覗き込んでいる。これはつまり、始まりに戻ったのだ、とここにいる汐音にはすぐにわかった。

「残念だけど、猫羽ちゃん……彼、あなたの体を使う気はないみたいよ。だから猫羽ちゃんとして目を覚ましてね……心配しなくても、彼はちゃんと、一緒にいるから」

そこにいたのは、翼権の元上司ナギに言われて猫羽を迎えに来たツバメと、猫羽をそもそも時の闇に送った張本人の詩乃。

どうやら猫羽が闇から還るくんだりで、素直に帰らない一悶着があったのだろう。それで詩乃が家系の力を使い、猫羽が観ていた夢物語を、己の謡で汐音に送ったのが今までの呪だった。

まだぼーっとしている体で、何とか起き上がったものの、猫羽の意識は内に潜む汐音より胡乱だった。

「……わたし……？」

詩乃が目配せし、ツバメが頷き、椅子から引き受ける形で猫羽をよっとおぶる。汐音になった猫羽でなく、汐音が潜むだけの猫羽をこれで連れて帰ってくれる。

猫羽が汐音になってからでは、ツバメは汐音を優先してしまう。それならこうして、ここからやり直すしかない。猫羽が消えた後悔を、詩乃がどれだけ予感していたかはわからないが、引き戻すために全力を振るったことは疲れた顔に滲み出していた。

教会を出るツバメの背中で、十字架の麓から猜の声が聞こえた。
——汐音は、猫羽になりたくはないの。

あの赤い目の影は見え、気配も何もそこには存在しない。ただ、ツバメが真羽家に向かっているのも、夕鳥の翼権が待つことはわかった。

それならこの世界でも、猜は現れ得るのだ。時雨に赤の鼓動を渡され、居場所をなくした翼権が夕鳥の内にいるのならば。

「.....なりたくないわけ、ないだろ.....」

眠る猫羽の声を使い、寝言を呟く。それくらいは許してもらおう。

ツバメが困ったように笑った。どうやらこの後、猫羽の内の汐音をどうするか、色々な者に相談するつもりらしい。

落胆が冷たい体から伝わってくる。こんな形ではなく、「汐音」が無遠慮に生きられる世界をツバメは望んでいる。

望む限り、ツバメはしばらくツバメでいるだろう。こたえはこれから探せばいい。

-了-



「火」：Apost-re

インマヌエル-神-

そんなの有り得ない、と。

気が付けば一月以上の時間が流れ、住んでいたアパートを知らない間に退去し、見知らぬ女の家に移り込んでいた。

それらを自覚した山科ツバメは、己の現状に啞然とするしかなかった。

「遅い、っつーの。この、天然女たらしくん」

「え、夕鳥.....いや、汐、違.....えっ...??」

何故か、「真羽」という家に住み込みの子守りバイトで、幼い子供の面倒をみている自分。

その子供の雰囲気突然豹変した時に、ツバメの意識ははっきり戻っていた。母子家庭にしては手広な一軒家で、リビングのソファに並んで座る黒髪の幼子が、子供らしからぬ無表情でツバメを冷たく見上げていた。

「で、どーすんの、お前。猫羽ちゃんが近所の公園で倒れてるけど、ほっといていーわけ？」

いいわけあるか。

わけはわからないが、実の妹が下宿近くの公園で、一人で意識を失ったらしい。

妹を見守るように頼んだ悪魔が、何故この家の幼子に憑いているのかもわからないが、幼子の体を使ってなされた悪魔の警告に、ツバメは急いでその家を出たのだった。

四歳も終わりかけた微妙な大きさの幼子を、ぎりぎり背負えるおんぶ紐に閉じ込め、ツバメはその紫陽花の公園に辿り着いた。

ナビゲーションしてくれたのは背中の幼子だ。ずっと手にするオモチャでツバメの頭をはたき、あっちに行けこっちに行けと細かく指定する。いつもはいたって普通の元気な四歳児なのに、今日はさっきからずっと、無気力で冷静な悪魔に変容していた。

「奥の休憩所で猫羽ちゃんが倒れてるよ。神域にあてられたみたいだけど、まあ命に別状はなさそうだから、大丈夫」

「神域.....って.....？」

「ここはちょっとクセモノな場所みたいだね。さらにまずいことに、猫羽ちゃんの内にいる神霊と相性がいい。多分霧や霞、見えるようで見えない欺瞞全般を扱う、無自覚な『神』の祠ほこらだったんだろうね」

幼子の言う通り、公園内にはあまりよくない感じのする霧が漂っている。それは「よくない感じ」としか言えず、実態を何も把握できない。そして把握できないことこそが真髓だ、と幼子は言う。

指示の通りに林間の休憩所に辿り着くと、本当に妹が一人で、薄い霧に包まれるようにベンチで眠っていた。横向きに丸まる妹の姿に、ツバメはとにかく、大きな溜め息をついた。

「こら、猫羽……いくら林の中だからって、昔みたいに山猫気分で寝てるなよ……」

「無理だね、当分起きられないよ。家に運んであげるしかないね」

幼子を既に一人背負いながら、高校生になった妹を抱えて運ばなければいけないとは。体力がもつか心配だったが、他に選択肢はなさそうだった。

お姫様抱っこで持ち上げようとする、眠る妹が胸元で、見覚えのあるドライフラワーを抱えていることにツバメは気が付いた。

「え、これ……ひょっとして、うちにあったやつか？」

「それがややこしいんだけど。うちにあったやつを水葵なみぎが猫羽ちゃんにあげて、それを持ってここに来た猫羽ちゃんと、何もなしにここに来た猫羽ちゃんが混ざってるんだよ」

「……は??」

「だから多分、その負荷で猫羽ちゃんは倒れてるの。持っててはいけない有り得ないものを、違う自分に近付いてまで持ってるからさ」

そこで幼子はツバメの肩越しに手をのぼし、今までツバメをはたいていたオモチャ——たにうつき谷空木のドライフラワーを、抱えられた妹の上にパサリと落としていた。

「持ってきて良かった。まさか本当に、ここまで時雨の言う通りになるとはね」

知らない間にアパートを引き払った際に、幼子は回収していたらしい。妹が持っていた谷空木と重なるように、幼子が落とした全く同じドライフラワーが融け合っていく。

ツバメにはとにかく、現状が全てわけがわからなかった。

一つになってしまったドライフラワーを握りしめる妹を抱えて進む。公園から妹の下宿まではゆるい上り坂で、普段は節約する力を体力に回さなければかなりきつい。だから幼子が言っていることの一割も理解できなかった。

「これは多分、ナギもどっかで関わってるな。そこまでしても、猫羽ちゃんにこれを持たせるってことは……つまりはこれが接点なわけか」

「……??」

「要するに、それでお前も、さっきツバメに戻ったってわけだよ。猫羽ちゃんがこれを手にした時点で、それは定まった未来なわけで……要するにほとんど猫羽ちゃんのおかげだから、少しは感謝しなよ」

何とか妹の下宿に辿り着き、同居の手伝い者に鍵を開けてもらえた。妙なことに、妹の部屋にも同じドライフラワーの花瓶があり、一緒に飾るとそれも一つに融けた。

帰路についた頃には、ツバメはへとへとだった。

「そうなると、オレもこれ以上、ユウを守る必要はないわけかな。時雨と一緒にここまで頑張るのも、まあまあ楽しかったけどね」

「.....はあ？」

「ほんとにあの仕事ぶり、お前にも見せたかったよ。初対面で陽子サンをたぶらかして、ユウの子守り役でがつつり居候して、ユウにもめちゃくちゃ懐かれてんだからさ」

幼子は一応、わけもわからず目覚めたツバメに、これまでの経緯を説明してくれているらしい。その意図はやっとわかったが、あまりに細かい情報が抜け過ぎていて、ツバメの現状把握には全く役に立たないのだった。

まず何故、ツバメは一カ月以上も意識がなかったのか。

そしてどうして、妹を見守るように頼んでいた悪魔が、人間の幼子にとり憑いているのか。

幼子は小さな白^{しろくろ}玄の翼を受け取っており、それが悪魔の宿る依代だろう。幼子の家に帰るまで、それだけ整理できたが、その後はしばらく悪魔は再び身を潜めてしまった。

「あ、お帰り、時雨くん！　夕烏を散歩に連れてってくれたの？　いつもありがとうね！」

日中のパートから帰っていた家主の陽子が、ツバメを明るく出迎えていた。

幼子もツバメの背で、いつもの明るい四歳児に戻っている。

「ただいまー、かーさん！　ゴハン、ゴハンー！」

「ちょっと待ってねー。時^{しぐれ}雨くんは今日もいらないの？　猫羽ちゃんに内緒で毎日夕烏を見てくれるのに、遠慮しなくていいのよ？」

ツバメはどうやら、楡^{うつき}時雨と名乗ってここにいた。妹の猫羽を陽子は知っているらしく、それでこんなに怪しい青年を家に置いているのだ。

「本当、夕烏が急に、保育園イヤ！　って言い出した時は、どうなることかと思ったけど。まさか猫羽ちゃん家から追い出された時雨くんが、無料で住み込みシッターをやってくれるなんて、びっくりしたわよホントー」

手早く料理を仕上げている陽子は、水商売をしているだけはある、人と話すのが好きらしい。いつまでも話題が尽きずに喋っている。

そうした最低限の情報を少しずつ思い出した。夕烏の名前やおんぶ紐の使い方にしてもそうだが、ツバメは確かにここでしばらく働き、そのことを体が憶えているようだった。

ツバメは何も食べないが、夕鳥の隣で食事を手伝うのも仕事らしい。

揃って食卓についたツバメの向かいで、今夜は仕事がないとのことで、缶ビールを開けた陽子が一息で半分ほど飲み下していた。

「ああっ、楽しいーっ。誰かと一緒に生活するなんて、私には到底無理だと思ってたけど、案外そうでもないものなのねー」

「……」

「シグレ！ そっち、とってとってー！」

夕鳥が欲しがらぬおかずをつまみ、黙って小さな皿に取り分ける。ありがとー！ と笑い、先刻の無表情は嘘のような夕鳥に苦笑う。

陽子は孤軍奮闘の育児からの解放感が相当大きいらしく、夕鳥のような聞き分けの良い子供相手でもそうなのだから、世のお母さんは大変だ。とツバメは思わずにいられなかった。

当初、陽子は、夜は夕鳥と共に鍵をかけた自室で寝ていた。それくらいはさすがに警戒して当然だろう。

元々日中のパートより夜の仕事の方が本業なので、陽子が家で寝ることは多くない。段々とツバメの存在に慣れてきた今は、仕事着のままリビングのソファで寝てしまうこともある体たらくだった。

「恥ずかしい話だけど、夕鳥にお父さんを作ろうかなって、頑張ってた時期もあるのよね。うちはまだ親がくれた家があるからマシな方だけど、シングルマザーってやっぱり大変なんだわー」

「……」

「もう、時雨くんがずっといてくれればいいのに！ 家出中だけだってわかってるけど、ほんと楽しいわあ、ありがとうね、時雨くん！」

頬を赤らめて陽気に言う陽子に、一瞬、誰かの影が重なっていた。

——あのさー、ツバメ。独り言だけど、こういうのって、思ったよりもずっと楽しいよねえ。

ずきん、と頭が痛んだ。隣に座る夕鳥が猫柄のお箸を握り締めて見上げてきた。

夕鳥は幼いのにとても勘が良い。心配しないようにぼんぼんと頭を撫でると、笑って安心したように食事を再開する。

食後の片付けを黙って始めようとする、すっかり酔っぱらった陽子が、皿を回収するツバメの腕にしがみついてきた。

「もうもう、いつもほんとありがとうね！ 時雨くん絶対いい旦那になるのにー！」

「……いや。ヨウコの方が、仕事もして親もしてて、偉いよ」

きゃー、と気分を良くして陽子が抱き着いてくる。ツバメを抱えてばんばんと背中を叩き、豊かな胸を無防備に押し付けてきたのは、さすがのツバメも少しまいった。

幸いなのは陽子にほとんど恋愛感情がないことだ。子供の前で大人の交際をしたくないという節度もある。気に入ったものにべたべたするのが好きなだけで、それで付け込まれる場合も多々あると観えたが、それはそれで構わない大らかさが陽子の持ち味だった。ただしそうした自由をさせてくれない相手には、とことん気を許せないらしい。

久々の休みで大分飲んだ陽子が、夕鳥を連れて早々に寝付くと、リビングに残ったツバメは一人、ぼつんと呟いていた。

「……平和、だ」

何故ここに住んでいるのか、未だに事情はさっぱり思い出せない。猫羽に追い出されたというのは、「時雨」の方便だろう。まずツバメは、猫羽と一緒に住んでいないのだから。

ここまで自分が、何故時雨になっていたのかもよくわからない。そしてどうして、一人でここにいるのか——さっきは夕鳥に憑いていた相方の悪魔は、いったいどこに行ったのだろうか。

——平和な目的のために、ただ平和に生きる。オレにはなかなか、できなかったよ。

しばらくリビングで待っていると、やがて、階段を必死に降りてきたらしい夕鳥——に憑いた悪魔が、姿を現していたのだった。

「迎えに来いよ、お前……この体、結構大変なんだぞ」

「ごめん。ほんとに汐音なのか、何か釈然としなくて」

ああ、と。納得いったように、ソファに登って座った悪魔が無表情にツバメを見上げた。

「それならお前の感じた通りかな。オレは汐音じゃなくて、翼権だよ」

「——え？」

「汐音はもうここにはいない。ユウに憑けるのはオレだけで、お前に今流してる力も、夕鳥から拝借した魔力の一部だしね」

「……え？」

何故かツバメは、悪魔が淡々と伝えたその事実に、大きな衝撃を感じるようになった。

「汐音は——どうしたんだ？」

「時雨が時の闇に連れていったよ。その時からお前はずっと時雨になってて、つい今日やっと、ツバメに戻ったわけ」

「え、でも……それじゃあ、アンタは？」

「残念だけど、時雨にやられちゃいました。ユウのおかげで何とかここにいるけど、ま、大したことはできないと思って」

今度ははっきり、普通に多大な衝撃を受けた。どうやらツバメは知らない間に、時雨という闇に乗っ取られて相方を殺してしまったらしい。

こちらの世界に来てから「力」が不安定だったのは確かだが、さすがにその醜態はない。がっくり……とソファに両手をついて項垂れるツバメに、夕鳥が無表情のまま、ぼすっとソファにもたれこんであぐらをかいていた。

「ま、気を落とすなって。それは汐音が望んだことだから」

「……へ？」

自分が殺されたにも関わらず、相変わらず呑気な悪魔だった。彼らが出会った頃から少しも変わっていない。

「今日は眠いから、これ以上は無理。二階に連れてって、ツバメ」

「……。じゃあ、降りてくるなよ……」

悪魔を抱っこして寝室に送ると、ツバメはリビングの隣の和室に戻った。そこがツバメの居候空間で、数少ない着替えが部屋の隅に吊るされていた。

黒一色の軽装ばかり、アイロンまでかけられた状態で並んでいる。

陽子が洗濯してくれているらしい。壁掛けの鏡に映るツバメの姿は、銀色の髪に青い目と、時雨の頃のままになっていた。

「結局……どうなってるんだ、これ」

——ほとんど猫羽ちゃんのおかげだから、感謝しなよ。

夕方に運んだ妹を思い出した。疲れ切っていた様子で、ぴくりとも目を覚まさない。気になったのは、いつまでもその身に薄い霧がまとわりつく感じがしていたことだ。

妹の性格上、悪魔の言う通り、ツバメをここに戻すために必死だったのだろう。悪魔が本当に時雨に殺されたなら、悪魔の力を分けられて生きていたツバメも滅んだはずだ。それでも幼い夕鳥が身に宿す「力」の量も相当多く、今もツバメには体を維持できる力が流れてきている。

いったいどれだけ、悪魔にも妹にも、そして夕鳥にも迷惑をかけたのだろう。あまりの無様さに気が遠くなりそうだった。

「汐音が……それを望んだって……？」

汐音や時雨がどう動いたのか、全くわからずに呻く。「時雨」の存在は、中途半端な吸血鬼のツバメにとって、時に完全な吸血鬼化する衝動に導くものでしかなかった。

ツバメが時雨だった頃に殺した「神」の使徒が、その衝動の元だ。鴉夜^{あや}という少女が持っていた悪神の翼の侵蝕で、時雨としての自我は一度ほぼ消えた。そのまま悪神に隠された彼が、時雨の名を持っていった。

翼の悪魔に出会い、悪魔の血を分けられて吸血鬼になることで、ツバメはツバメの名と過去の記憶を再び手に入れた。それは何処か、他人のアルバムを見ている感覚でもあったが、時雨の頃に知り合った者達へ昔と同じような感情が湧き出すのだから、自分を疑う事態はこれまでなかった。

ひとまず何があったかは一応把握できたのに、その因果が全くわからないため、ツバメは酷く落ち着かなかった。

妹が倒れていた公園の違和感も気になる。夕鳥と悪魔が眠ってしまった以上、することもないので、もう一度あの公園に行ってみることにした。

真羽家の鍵を静かに閉めて夜の街に出る。夕方もそうだったが、合鍵が何処にあるかは手が知っており、ポケットから勝手に取り出していた。

ほとんど知らない夜道で辿り着けるか心配だったが、それはすぐに杞憂に終わる。
「何だ——あの霧……」

おそらく公園がある方向の空に、夜空よりも黒い霧がごく一部にかかっている。その真下を目指していくと、ほどなくあの公園が現れたのだった。

煉瓦の花壇がある公園の入り口は、そこから立ち入ることを躊躇するほど黒い空気に包まれていた。しかし公園の奥にふっと見えた人影は、その猶予をツバメに与えなかった。

「て、猫、羽——!？」

下宿に戻したはずの妹の姿。無表情にバイト用の魔法の鎌を持ち、黒い霧に包まれた公園で佇んでいる所へ、ツバメは思わず走って向かう。

その広場まで駆け付けると、妹は途端に、ゆらゆらと蜃気楼のように薄れ始めた。
「——!？」

一度だけ、妹がとても冷たい目付きでツバメの方を見た。

バイト時の受付の装いに、何故か背中から生えている黒水の翼。闇夜に艶めく大きな鎌と、金彩を宿して光る紅の目。

呆気にとられている間に妹は周囲の黒い霧に包まれ、やがてすぐに、消えていってしまったのだった。

「猫……羽……？」

呆然とする間もなく、立ち尽くすツバメの背後から知らない声が急にかかった。
「なるほどね。それが時雨君の避けたい未来——使徒化した猫羽ちゃんってわけ」
「!？」

振り返った先には妹と同じ高校の制服で、何故か見知った姿がツバメを見ていた。
「え——汐音？」
「残念、ハズレ。顔は同じはずだけど、あたしは橘ナギ。君にはアスタロトとして会ったことがあるけど、思い出せない？」
後ろ手を組んで言う青銀の長い髪の女に、ツバメもどうにか思い至った。
女の体は汐音——翼の悪魔を模して造られた人形だ。それに宿るのは汐音の元上司だった墮天使で、ツバメには親戚に近い存在でもある。
一言で表せば、ナギはツバメの母を守ってきた天使だ。過去と未来を覗けるアスタロトという、高位の悪魔の適性を持つ母に代わり、アスタロト城の管理をしている墮天使。
「あんたが、何でここに……？」

何もせずに広場で立っていると、不審者扱いされる。そう言ってナギがブランコに座るので、ツバメも並んで隣のブランコに腰をかけた。
「とりあえず、遅くなってごめんね。汐音からSOSを受けたのは一月前なんだけど、色々邪魔があって、やっと今頃ここに来た次第なの」
「……」
「あたしの代わりに水葵が先に、君達の所に着いてしまった。そこから時雨君に好き勝手にさせたわけだけど、随分ややこしい事態になっちゃったわね。今後はどうやら、貴男が接点みたいよ、ツバメ君」

きい、と僅かにブランコを揺らすナギは、ツバメの方を見ずに沈んだ顔をしている。
傍目から見れば、女子高校生を相手に、ツバメが別れ話でもしているように映るだろう。それも十分不審人物だと思いつつ、ツバメは気になっていたことの確認に入った。
「今日、猫羽にあの谷空木を持たせたのは、あんたか？」
「ええ、そう。ツバメ君は怒るでしょうけど、猫羽ちゃんの未来を一つ犠牲にしたあたしの賭けよ」
「……？」
「でも時雨君にとっては、『一つ』ではなかったのね。さっきの霧でわざわざ見せてきたのは、時雨君が望まないもう一つの未来。このまま行けば猫羽ちゃんはあるって、わざわざ教えてくれたわけだけど……さてそれで、ツバメ君はどうするつもり？」

わけもわからず話を振られ、ツバメの声が思わず低くなった。
「どうするって……俺が聴きたいんだけど。俺はまず、何をしなきゃいけないんだよ」
「さっき言ったでしょ？ 今後の接点は貴男——未来はここで分岐するの。これは因果のさざなみが仕組んだ悪いゲームよ。この先誰が使徒の業を継ぐか、水門の守り手達が、貴男と猫羽ちゃんをこの時空に引きずり込んだ」
ナギがブランコを止めて広場を見つめる。時雨のように時を渡れるわけではなく、青白い目が視れるのは断片的な過去と未来らしい。

「さざなみは実態を顕さない。様々な人を闇から使徒にする。時雨君も知らず、利用されたわけね。途中で気が付いたから、今はあたしを泳がせている」

「それは.....ナギを邪魔してたのは、時雨ってこと？」

「最初はそうだった。でも時雨君を動かしたのは烙人。そして猫羽ちゃんをここに誘ったのは風漣^{かざり}。迂闊だった——二人も無自覚でしょうけど、あの二人には水門.....ロックキーパーの素因があるから」

ツバメには正直、ナギの言葉の意味がほとんどわからない。しかしツバメの行く先を導くためにナギが現れたことはわかり、黙って素直に話を聞く。

「簡単に言うと、あたしと敵対する『漣』って使徒がいるの。主たる神に、奈落の火の池を任された暗黒の風.....秩序と混沌の渡し守で、秩序の管理者たる時雨君には上司ね。漣が敷いた分水嶺にあたし達はいて、四人の混沌の少女が生け贄候補になった。誰を犠牲にするか選ばなきゃいけないの、ツバメ君は」

「——」

「一人は猫羽ちゃん。猫羽ちゃんをさっきの姿にしたいくないなら、今から下宿にいて谷空木を回収しなさい。そうすれば君にはもう関係のない話になる」

今度はナギの言うことがわかった。だからこそ納得いかない面が出てきた。

「それじゃあ、あんたは何で、猫羽に谷空木を持たせたんだ？」

「だからあたしにも賭けだったのよ。時雨君とは基本協力できない以上、ツバメ君を起こして新たな接点を作るしかない。でもあたしも猫羽ちゃんに、谷空木を持たせたくはなかった」

「.....」

「だからツバメ君にきくの。谷空木を回収すれば、君は時雨君に戻る。それでも君は猫羽ちゃんのために谷空木を回収する？」

ツバメが接点だ、と何度も言ったナギ。その真意はまさにそれで、ナギの内心にも大きな葛藤が渦巻いていた。

詳細はわからないが、妹はたとえ危険でも、このままツバメの維持を望むとナギは知っている。そしてナギの望む未来も近いところがあると観える。けれどそれはツバメの妹を危険にさせる。

妹が手を引けば十中八九、時雨の望む未来に戻る。それもナギには及第点のようだが、そこには大きく欠けたものがあると、ナギの思いを探る内によく気が付いていた。

「ナギ.....汐音は、どうなるんだ？」

「.....」

だからナギは、わざわざツバメに問いに来たはずだった。

実際問題、ツバメが消えるだけならツバメもナギも気にしない。それより困ることが何か、時雨に戻ると起こってしまうのだろう。

ブランコの鎖を両手で掴んでナギが俯く。ナギにとっても何故か汐音は、大事な相手であるらしい。かつてナギの部下だった天使の羽を汐音が持つことを、ツバメは知る由もない。

それでもナギはきっぱりと、彼らの置かれた現実を明らかにしていた。

「ツバメ君がいれば、汐音も帰って来れる。今の翼権君みたいに、喋るだけなら何とかなるわ。でも汐音には——最終的に、あの子が満足な実体を持てる未来はないの」

「——」

「だから時雨君も、あの子を時の闇に連れていった。何の解決にもならないとしても、あの子をただ、消さないために」

知らず、古いブランコの鎖を、錆がぼろぼろと落ちるほどにツバメも握り締めていた。——こういうのって、思ったよりもずっと楽しいよねえ。

在りし日のその声が、ツバメの頭に何度も響いた。

本当に汐音は楽しそうだった。ただ生きて、人間のように生活しているだけであんなに楽しそうだったのに。

それなのに汐音がもう一度、ヒトとして生きられる未来はない。そんなことがあっていいのか——ツバメの全身を、言葉にできない衝動が走り抜けた。

気が付けばツバメは、ただ勢いだけで、そのこたえを口にしたのだった。

「そんな未来……俺は知らない。汐音が帰るなら、谷空木は放っとく。汐音が生きられる方法を、そのあとに探すよ」

「……」

「それで猫羽が危険だとしても……俺は汐音の『鍵』なんだから」

一瞬、ナギが驚いたように顔を上げて、隣にいるツバメを見つめてきていた。

ツバメもどうして、そんなにすぐに断言したかはわからなかった。それでも意志を変える気もなく、口を引き結んでナギの視線に対峙していると、今まで沈んでいた顔が一転して明るく笑った。

「あはははは。汐音に直接聞かせてあげたかった、今の言葉」

「……——」

「それなら後は、三日後に猫羽ちゃんを、ある教会に迎えに行っておいて。汐音を連れて、疲れ切って帰ってくるはずだから……これは時雨君が教えてくれたことだけど」

「——へ？」

ざ、と、ブランコから降りたナギが、乾いた砂地の上に立ち上がっていた。
「教会の場所は翼樫君が知ってる。これは『ツバサ』の君を消す道だけど.....頑張っ
ね、運命を変えてきた鬼子達」

「.....？」

「あたしと君の望みは違う。何処にも視えない未来なんて、あたしは望めないから」

後ろ姿で言った制服のナギ。これはきっと、ツバメの無謀な決意に対する宣戦布告だ。

ナギも時雨も、この先信用することはできないだろう。誰もが各々の賭けに出たのだ。
ここから彼らの大きな揺らぎが始まると、夜風になびく青銀の長い髪が語っていた。

「それでも君と、汐音の解放される未来が.....何処かにあるといいのにな」

そうして、哀れみを残して墮天使は去っていった。

最も成算なき未来を選ぶ、鬼子の使徒に祈りを込めて。

一人で取り残された後に、ツバメに浮かぶのは頭の痛い問題ばかりだった。

「ひょっとして、俺.....これから先、夕鳥を育てて相方にするのか？」

おそらく自業自得とはいえ、間違えたのは何処からだったのだろう。そもそも何をツ
バメは間違えたのだろう。

ツバメにはただそれだけが、時雨に問い正したい重い不満だった。

やがて示される神の姿に、白玄の翼のカラスは^{かしず}傳く。

青銀の鳥も翼を広げる。ひたむきな雨が籠を満たし、鳥の渴望を押し流すまで.....。

To be continued “Atlas’ κ ε ρ α ☒ α /Apost-re” ?

聖霊火

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
